

近代建築の離大地性

熊澤 栄二 (独)国立高等専門学校機構 石川工業高等専門学校

1. はじめに

昭和十七年(1942年)八月、世界的な仏教学者としても活躍した鈴木大拙(1870-1966)が齢七十一歳にして故郷である金沢からほど近い富山県石動において「大地と宗教」(『一禅者の思索』講談社学術文庫792, pp.99-125, 講談社, 1987年)の講演を行っている。この時期は、まさに大東亜戦争の転換点とも言われるミッドウェー海戦の二か月後、またその引き金ともなったドーリットル空襲により、帝都が史上はじめて空襲に晒された四か月後にあたる。

「大拙は都会の近代生活を人間性を否定する方向にあるものと分析し、人々が人間性を回復するには、人間の生と大宇宙の永遠性とが交流する「大地の生活」の再評価が重要であるとした」(水野友晴「〈第2部 地質・資源の文化と思想〉再考、鈴木大拙「大地」の思想——地質学との接点を求めて」/『日文研共同研究報告書第200号/日本文化の地質学的特質』, p.105, 国際日本文化研究センター, 2024年)と水野は講演の要旨を紹介している。しかし、大拙はその講演のおよそ半分を費やして近代建築と日本建築を比較しながら、それぞれの特徴を具体的にそして平易に語りかけている。建築を学ぶ者としては、むしろ水野が指摘する大地の生活そのものよりも、この前半部分にこそ魅かれてしまうのは技術者としての性であろう。

ところで、近代建築については「人間性を否定する方向」すなわち「大地を離れる近代生活」として語られる一方で、日本建築については「大地の生活」が色濃く反映した「大地に坐る誠の生活」(大拙 op. cit. p.111)として特徴づけられている。大拙の講演から約八十年が過ぎた現代の目を以て大拙の指摘を省みても未だ色あせることはない。「われらのいわゆる近代生活なるものは、こういう地方にいとあまり目に着きませんが」(ibid., p.99)と講演の地である石動に配慮して断りがいれられている。近代生活に馴染みがない田舎の生活者に対してやや大袈裟に語られている嫌いも拭えないが、二十一世紀も四半世紀を過ぎた現在、講演地であるかの田舎にも近代生活は既にあたりまえの風景^①になってしまった。

さて、本論をすすめる上でその視点とも言うべき論点を紹介しておこうと思う。大拙は一貫して、「近代生活の離大地傾向」(ibid., p.123)として「今日の時

① 私事ではあるが、石動から一駅、10km圏内に居住している。

勢」「時代」(ibid., p.99)を批判的に語るが、この「大地」は大拙にとって建築の在り方を決定づける主要原因として語られる。すなわち離大地性の「離-」の運動を「建築のテクニクス」^②として、その力学を論ずる必然性もここにあると考える。近代化という地殻構造がいかに形成され、また「大地」というプレートからいかに乖離するのか。その軌跡を追跡するためにも、はじめに大拙の近代建築批判の要諦を観察することにした。

② オンライン語源辞書ethmonlineによれば、tectonic(adj)およびtectonics(n)の語源は以下の通り解説されている(<https://www.etymonline.com/search?q=tectonic>, 2025年7月25日参照)。

tectonic(adj.)

1650s, "of or relating to building or construction," from Late Latin *tectonicus*, from Greek *tektonikos* "pertaining to building," from *tekton* (genitive *tektonos*) "builder, carpenter, woodworker; master in any art (sculpture, metal-work, writing)," from PIE (引用者注: Proto-Indo-European) root **teks-* "to weave," also "to fabricate." The geological sense, "pertaining to the structure of the earth's crust," is recorded from 1887.

tectonics (n.)

1899 in the geological sense, "structural arrangement of the rocks of the planet's crust," from *tectonic* (also see -ics); earlier it meant "building or constructive arts in general" (1850).

また『英語語源辞典』(寺澤芳雄編: 研究社, p.1410, 1997年6月)によれば、

tectonic adj. 1《1656 Blount》構造上の: 構築の. 2《1894》【地質】地質構造上の. ◆LL *tektonikus* Gk *tektonikós* skilled in building ← *téktōn* carpenter, builder (⇒ TECHNIC): ⇒ -IC¹.
◇初例は *tecktonick* の形で。

2. 大拙の近代建築批判

2.1 離-自然としての近代建築

大拙は、近代生活の特徴として、「近代生活では何もかも機械的になるのです」との結論から語られる。このことは「学問的に言えば、科学化して行くのです。……何もかも科学で支配させるようになるのです。そしてすべてが、組織化し、機械的になるのです」と言い換えられていく (ibid., p.100)。

この結論を例証するように近代的な建物の在り方が描写される。「かような高い建物を造るということは、これは建築術というものから見ると、なかなかの知識と技倆の要ることなんです。……上方に高い建物ができるのには、他方、地面の下に、それだけ深く掘り込んでおかないといけない。……専門的なものがなくてはならぬ。力学・数学・物理学・建築材料学などの知識が要る。また、この知識ばかりではなく、気象学・地質学などについても、色々の研究が要るであろう。そういう点で、どんな建物を造るにしても、非常に科学や実際の機械学の力が要るのです」(ibid., p.100f.)

さらに高層建物内の生活環境を維持するためにエネルギーの問題が語られる。「いよいよこれができるというと、そこには、昔のような石油や灯油のランプを点けるわけには行かぬ、夜昼の差別なしに明りを採用する必要があります。……光は要るので使わねばならないが、そうすると、熱が出る、……そこで近頃は熱の出ない蛍光灯というものの発明があって、それを利用することになっている。……高い建物となると、……一気に、二十階、三十階をも昇り降りのできるために、あの函のようなエレベーターができて、電力で昇ったり降りたりしなければならない。……普通の日本在来の建物であるならば、囲りを開放しておけばよいが、高層建築では四囲を開放しておけない、……そこで電気仕掛けで、扇風機を使わなくてはいけない、或は室の中を冷やす冷房装置という事が必要である、或は暖房もいる。そうすると近代生活は全く人工的になる」(ibid., p.101f.)

これらの語りに続けて「物理学や何かででき上った建物、その中に入る時、既に色々の機械でできたものに頼らなくてはならぬ。そうしてその中へ入ってしまうと、冬も夏も変わらないということになる。自然界の気候などからあ

まり支配を受けないということになる。かような具合で、近代の都会生活は段々自然というものを離れて行くのです」との総括からも、「離－自然」こそが大拙の近代建築観におけるテクニクスと言えるであろう。

2.2 離－大地としての都会生活

大拙は、さらに近代的な建物により構成される都会の生活について語る。「街へ出て見ると、地面すなわち大地を踏むということが無くなった。……現今の町の生活になると、そんなに大地を踏まなくてもよい。大地を踏まなくてもよいんだから、大地を益々離れて、大地とは直接の交渉がなくなる。……近代の街というものは、そういう具合になって、よほど自然と相離れて行くようになってしまっているのです。かような処に生活すると、人間もまたそういうふう自然を遠ざかる人間になるのです」(ibid., p.102f.)という。近代建築の周囲は大地——この場合は地面を意味するが——から遠ざかる。この意味で建物の外部もやはり「離－自然」であると大拙は指摘しているのであろう。

このような近代都市の中での住まい方について続けて次のように切り出す。「今日、一軒毎に家を建て、そして少しの庭でも持っているということは、はなはだ不経済であるというので、いわゆるアパートなるものができた」(ibid., p.103)と。大拙はこの「不経済」そのものについては特にこれ以上の説明を加えていないが、話の筋から察するに、面積あたりに対する居住者数の効率性を勘案して不経済と断じているのであろう。「そしてそのアパートなるものは、皆借り物であって、自分の所有の物ではない。そこには自分の先祖代々が住んできたというわけではなく、ただ自分だけが、四、五年前に来たということで、いずれまた出て行くのである。すなわち宿借りの生活であります。それでは定住ということが無くなる」(ibid., p.103f.)

この定住ではない住み方について大拙は「一時的」と言い換えているが、家族の在り方を検討することでその性格がより鮮明になる。「大地はこれに反して、誠に永遠性そのものである。そうして都会的近代生活をせぬ地方人はこの永遠性を分有している。昔からの位置さえも変らぬ処に何百年も住んでいて、先祖代々ということが言われている。また「家族」ということも、永遠の意味で考えられている。元来、家族というものは、大地即地面を離れては無いものなのです」(ibid., p.104)と断言している。大拙は土地あるいは大地を離れて家族が成り立たないことを、「家族主義」の扇動と「墓」の問題を取り上げて論じている。

ところで建築学の分野においても、大正期から昭和初期にかけて改良住宅が大きな課題となったが、建築プランについても接客間の形式から中廊下式の導入には確かに「家族主義」がその主張にあった^④ことを想起させる。あまりにも有名な多摩ニュータウン、高蔵寺ニュータウンなどの戦後の家族主義の在り方を理想とした巨大ニュータウン計画の多くが廃墟化していることを目の当た

④ 中廊下式の発生については、木村徳国の学位論文「明治時代の住宅改良と中廊下形住宅様式の成立」に詳しいとされる。特に木村は「『住宅改良会』主催設計競技(1916)の入選案3案を『完全な中廊下形住宅様式として良いのである』と評している」(横井浩志・鈴木義弘「日本住宅近代化過程における洋室付加の影響に関する史的解釈の再考」／『日本建築学会計画系論文集 第88巻 第814号』, 2023年12月, p.3206)とある。中廊下式の典型と評価される剣持初次郎の『懸賞募集』第1等案が1916年であるので、大正中期には中廊下式により家族中心の生活が一般住宅として定着したと見なしてよいであろう。

りにする現在、建物そして都市の合理性を徹底させることがかえって地域の荒廃をひきおこすことは周知の事実である。

従って、都会の近代的生活における大拙の素描からは「離-大地」というテクニクスを観ることができる。特にこの文脈における大地は土地という具体的な表象をとまなうが、本質的には永遠性という時間の問題が潜んでいることは注目してよいであろう。

3. 受容性としての建築構造

3.1 コンクリート造の非受容性

大拙は近代建築と日本建築との対比から、建物の構造そのもの、すなわち建築のテクニクスに話を進める。「ここでは、家が木造であるので、近代的都会の建築とは大変相違している。都会の煉瓦やコンクリートの建物は、日本古来の建物のいずれも木造であるのと大いに違うのはもちろんであるが、このコンクリートや煉瓦の建物は、なるほど、火事の恐れや或は空襲の害を受けるといった方面から考えると、それではなくてはならぬ、木造ではいけないのです」(ibid., p.106f.)

京都の建物疎開の開始は、空襲が激しくなる昭和19年7月からなので、そのおよそ二年前にもかかわらず空襲の備えとして建物に対して防火性能の必要性が説かれたのはドーリットル空襲の衝撃からであろうか。その点においては、木造の劣位性も意識されている。さらに木造については「都会を飾る荘厳性もない」あるいは「木造の家屋は煉瓦などでできた高い建物の中に並んでいると、都会の美観というか、都会の威厳というかが大いにかけて見える」(ibid., p.109)と異口同音に指摘されている。木造をいわば他山の石としてコンクリート造のもつ荘厳性、威厳といった性格が説かれている。いずれの意味としてもコンクリート造には、人を圧するような、また人気を寄せ付けぬ厳しさを彷彿とさせ、木造の親しみやすさや親近感とは真逆であることは確かであろう。

さらに、「あんな建物は、単に幾何学的感じが濃いだけで、あまり美術的な感じがしない。またわが国では、特に湿気のことを考えないといけない」(ibid., p.107)と大拙の手厳しい指摘が続く。「で、この例ですが、東京あたりに二、三十年前に建てたものが、梅雨ですか、夏ですかになると、みな湿気を帯びて、ベチャベチャになるといいます。そうなると住むことができない」と大正期に建てられたコンクリート造^④に苦言を呈している。湿気だけではなく、音の響きについても「今のように喋舌っていても、音響は木に幾分か吸い込まれるが、コンクリートになると少しも吸い込まれずに、直ちに反響してくる」(ibid., p.108)と言う。

以上、大拙によるコンクリート構造批判を枚挙してみたが、防災性能、荘厳性、幾何学形態による美的な感じの欠如、湿気をはじめとする気候風土性の欠

④ 昭和17年より20-30年前となると、大正12年(1923年)関東大震災前の鉄筋コンクリート造の建物を指している可能性が高い。塩手らは「関東大震災では、鉄筋コンクリート造は概して被害が少なかったが、米国式構法によるものや、配筋が不備なものは被害が発生した」(『大正時代後期に建てられた歴史的建造物の解体調査および実大フレーム載荷実験 その1 解体部分における配筋調査およびこれより推定される当時の設計方針』/『日本建築学会大会学術講演集(東北)』, 2009年8月, p.661)と指摘している。特に大正8年公布「市街地建築法」の改正がなされた大正13年以前の建物では、耐震設計が行われていないことはよく知られているが、実際に米国式異形鉄筋システムである「カーンバーシステム」では、せん断補強筋であるスターラップは皆無であり、当時の設計法では鉛直荷重のみの検討であったという。

如、音声の非吸収性などいずれの特徴にも周囲環境からの独立性や単独性、あるいは自律(立)性を示唆しているように思われる。翻って、コンクリートという近代技術による製造物に対して大拙は、まわりの環境からの影響を受容しない在り方について語っているのであろう。

近代の建物批判のおわりに突然、「また近代の都会の町々を縦横にかけまわる電車です。都会の建物及び交通というものは、やはりそうしたものでないと具合が悪いんですが、今のところでは東洋的なものと大いに相違しています」(大拙 loc. cit.)と電車の例をだして話を端折ってしまう。電車については特段筋立てて話されていないので唐突感是否めない。しかしこれも近代交通体系が自律的に周囲環境との折り合いとは無関係に、環境からの影響を受容しない在り方をしている、との主張^⑤を託していると思えば筋も通るであろう。

⑤ 和辻哲郎『風土——人間学的考察』(岩波書店, 1979年5月)において、大拙とはまた異なる角度から、日本家屋、都市、電車などの交通体系を論じている。「道路や電車線路の異常な延長、電線やガス管などの異常な分量、交通のために要する時間と神経の浪費、これらすべてだったださにもとづくと言える。つまり日本では、大都会になればなるほど不便なところになる。経済的にも心理的にも非常に浪費をしながらしかも生活はいっそうに快適にならない。それが帰するところ都会と家との不釣り合いにもとづくのである。」(第三章 モンスーン的風土の特殊形態／二 日本／ロ日本の珍しさ, p.192)との記述から、和辻が初稿を起した昭和4年往時の状況においても、鉄道網が日本の経済状況や住宅事情を反映せずに敷設されていたと実感していた人も一定数いたことが分かる。

⑥ 拙稿「アンチポデスとしての建築——虚実の反転」(『建築論研究 第4号 建築と自然・聖』, 『建築論研究』編集委員会, 2025年)の「3. ヒエロファニーとミアレ」に考察をしているので参照されたい(p.32f.)。

⑦ 兵藤一夫:「威神力」, 教員エッセイ 読むページ, 大谷大学, 2025年7月25日参照, https://www.otani.ac.jp/yomu_page/b_yougo/nab3mq000011588.html
兵藤は「威神力」とは、サンスクリット語 anubhāva (アヌバーヴァ)の訳語で、原義は「実現させるもの」「経験させるもの」である。と説明する。

3.2 木造の受容性

改めて、大拙は近代の都会的偉観について、その要因を「土地的環境を離れて、独立して建てることのできる」(ibid., p.109)と自らの解釈を示している。その一方で、木造のもつ価値についてコンクリート造と真逆の在り方が語られる。「しかし、都会を離れた処で日本流の建物を見ますと、地面すなわち大地と切り放されない限り、優美な、崇い、一種の森厳性というもののさえが、この日本の建物にあるのであります。すなわちお宮などに詣でたとしますと、その建物は、建物だけとしては存在の意義を持たないで、これが、大地すなわち四囲の環境と一つになって取り入れられる時、大いにその価値を発揮します」(ibid., p.109)と指摘する。このことをさらに社の持っている有難味あるいは厳かさは「社自体が持っているのではなくて、環境と合併するところにその価値を出すのであります」と強調する。社とはそもそも杜であり森を意味している^⑧ことから明らかであろう。

さらに大拙の注目は屋根に至り、木造の本質とも言うべき大地との親和性が語られる。「宮や寺の屋根にしますと、寺の屋根は、宮の屋根と異う点もあるが、宮の屋根は、森の中に置かなくては、その厳か味がなくなるわけであり、寺の屋根の方は、あの屋根のなだれというか、スーッとなっているところ、あのスウィープは、町の中にあっても、その建築のもつ威厳性を保って行けるのでありまして、和やかな曲線美は、それ自身で維持して行けると思います」(ibid., p.110)と語る。宮の屋根は四囲の森と一体となることで文字通りその森厳性が発揮されるが、寺の屋根は町と一体化することでその威厳性が表現される訳ではない。むしろ、寺の屋根は、そこに坐する人の心を落ち着かせる力を発揮させる威神力の現れと説く。「これは高いところから下に加わって来るもの」と言い換えられるが、まさに「諸仏が目に見えてこない形でわたしたちの仏道の歩みを手助けする力、覚りを実現(経験)させるために働きかけてくる力」^⑦の表象

として人を大地(永遠性)の上に坐らせる(anubhāva: 実現させる／経験させる)ものであろう。

それ故、大拙が近代建築に対する総括として「近代風の建築は、皆大地を見ずして、空を見ることになっているのであります。……それで近代建築は、段々とこの大地との親しみを薄らげて行くのです」(ibid., p.110)と語る。この言葉は確かに建築の意匠論として、近代建築の造形原理と邂逅を果たす。越後島は「インターナショナル・スタイルとは、いってみれば「壁面がつくるロの字型(引用者注：自由な完結)」の完結効果を前面に押し出して強調し、「構造体のコの字型(引用者注：大地に依存した完結)」を最低限の線材へと、視覚的に価値低下させたものだった。「純粹立体」も「ピロッティ」も、あるいは「新しい技術」も、何よりそんな「空中での完結」の表現手段として意味を持っていたはずである」^⑧と指摘している。コーリン・ロウならば、インターナショナル・スタイルとは表層の平滑さ^⑨に近代建築のテクニクを認めるかも知れない。しかし大拙ならば、むしろそれを基礎づけている「建築を大地から離脱させている動き」のうちに本質的な近代建築のテクニクスを見出すにちがいない。

⑧ 越後島研一：世紀末の中の近代 オットー・ワグナーの作品と手法／建築巡礼10, 丸善, 1989年3月, p.41f.

⑨ コーリン・ロウ(Colin Rowe, 1920-1999)は、ル・コルビュジエにとって実現した最初の作品であるヴィラ・シュオプを取り上げつつ「そしてこの立面はさらに、背後のヴォリュームからの厳然とした独立性を主張しており、表層的に探る限りほとんど無関係にみえるほどである。事実、もしその簡潔で、角ばった特徴が建物の他の部分の曲線的な配列と無関係であるならば、その排他的で直線的、自己完結的な形態は庭側に現れている構成の型まで否定してしまうように思われる。」(コーリン・ロウ／伊藤豊雄・松永安光訳、『マニエリスムと近代建築』, p.38, 彰国社, 1981年)と分析を行う。

4. 建築の近代化の背景

4.1 工業化というテクニクス

近代建築の批判として離大地性を語り終えたのち、大拙の批判の目は工業化に向けられる。工業化による人間疎外とも言うべき状況のまなざしの先には、人間性の恢復あるいは救済としての宗教の果たす役割が語られる。結論を急ぐが、「宗教は農に依存するとか、或は農そのものが宗教であると言ってよいところがあります」(ibid., p.121)との示唆には「大地はそんなに穢い物でも何でもかでも、皆収めてしまう。そしてまた収めたものから、新たな生命を産み出させる」(ibid., p.120)という大地の慈悲あるいは浄土とも通底するその「はたらきの具体」として大拙は農(業)に注目している。大地は一切を覆蔵しかつ生み出す。このはたらきこそ自然そのものであり、古語のムスヒに通じる(vid. 「アンチポデスとしての建築——虚実の反転」, p.27f.)。われわれ人間はその自然の循環のひとつであるからこそ「大地とわれらの身体というものはすこぶる密接な関係をもっているものです。大地がすなわちわれらのからだそのものなのである。大地とはわれら、大地とは人間という事ですあります」(大拙 op. cit., p.121)と帰結する。従って「大地を離れる事は、人間でなくなること、人間性と絶縁することである。大地を離れては人間は駄目なんです」(ibid.)と矢継ぎ早に語られる。

ところで大拙は、離大地性とも言うべき動向を主宰しているものとして近代生活をあげる。「近代生活というものは機械生活・科学生活・工業生活・大量生産生活で、皆概念ででき上ったものである。近代生活は概念生活・抽象的

生活であると言ってもよいわけであります。そういう生活は皆ことごとく大地という最も具体性のものを離れている」(ibid., p.121f.)と喝破する。この近代生活を成立せしめる根拠として大拙は「工業的の方面」に注目し、その離大地性を扇動する仕組みとして大量生産を、さらにその動性のなかにある人間存在の存在様式として分業に言及する。

生産コストを抑えるためには手作りでなく、日用品の機械化、特に「それぞれの部分品だけを特にこしらえる機械」(ibid., p.112)をいくつも取り揃える必要を大拙も認める。大量生産のためには「部分部分を専門的にこしらえて、而してそういうようにこしらえられたものを最後に一つに集めて組み立てる」と描写する。このようにして人間の労働は部分最適化され全体の工程を知らぬまま「自分は何もわからないと言わなければならぬ。一つの機械を動かしている人は、その機械と製品は知っているが、それが全体の上においては、どんな役割をつとめているのか、それはわからぬ」と言われる(大拙 loc. cit.)。さらにすべての労働が機械的に分業的にできるということになると、この機械を使うと思っている人間が機械化して、彼は却ってそれに使われるということになる。このような状況下において「靴で申せば、カガトを拵える人間は、まるで靴のカガトになってしまうというわけであります。そうすると「人間」というものは無くなってしまう^⑩。人間の創造性、潤いとか柔か味とかいうようなものは、ことごとくそっちのけで、ただカガト一点張り、それを作る機械そのもので行くことになるのです」^⑪と説く。またこの状況は「手工ならばとにかく、機械で作ることになると、作り手はその機械の一部になるより外ない」(ibid., p.114)あるいは、「始めは使うためにこしらえた機械であったが、今後はそれに逆にこっぴどく使われる」(ibid., p.116)とも語られる。

近代的生活を底支えている大量生産時代のこのような大拙の批判は、確かに M. ハイデガー (Martin Heidegger; 1889-1976) の後期技術論で語られるゲ・シュテル (Ge-Stell) 論にも通底するであろう。それ故に「人間と機械」との関係として表象される以前の、大拙が語る大地の健やかなる現われが近代社会生活においてすっかり変容し、人間と機械との緊密な関係として現れるサイバネティクスの時代をいかに招来させたのか。この歴史的な転換点の探求こそが近代的な建築のテクニクス、すなわち建築における離大地性の始原となるであろう。

4.2 技術社会のテクニクス

君の著作『労働者』(一九三二年)は、ヨーロッパのニヒリズムを第一次世界大戦後のその局面に於て記述することを果たした。……『労働者』は「能動的ニヒリズム」(ニイチェ『権力への意志』第二番、第三番、そ

⑩ 因みに、リセ時代、アラン (Alain/Émile-Auguste Chartier; 1868-1951) に師事し、のちに哲学の教職に就いていたシモーヌ・ヴェイユ (Simone Weil; 1909-43) は、25歳のとき自らの意思でアルストン社やルノーなどの工場で女工として働いた(田辺保訳『工場日記』ちくま学芸文庫、筑摩書房、2014年)。その中で労働の非人間性について省察し労働者の根こぎの状況を改善するためにサンディカリズム(syndicalisme; 労働組合主義)に傾倒する。第7章参照。

⑪ 大拙 op. cit., p.113。この件については、例えばジョン・ラスキンの『ヴェネツィアの石——建築・装飾とゴシック精神』(内藤史郎訳：法蔵館、2006年10月)に近代社会における工場制の分業がいかに人間を摩耗させるのかを異口同音に記録している。「最近、分業すなわち労働の分割という偉大な文明による発明が研究され、大いなる完成の域に達した。ただし、私達はそれに虚偽の名を与えた。真実を言えば、分割されたのは、労働ではなく、人間なのである。人間が単なる部分に分割され、生命の小断片、パン屑の切れっぱしにまで粉碎された。それで、人間に残された英知の薄片は一本のピンや釘を製造するのにも十分でなく、ピンの先端や釘の頭部を作るのに疲れ果てる。……もし私達がどんな透明な砂粒でピンの先端が磨かれるかを見れば、それが拡大されて人間の魂の砂粒と分かったら、私達はそこにも幾らかの損失があると考える。」(p.261f.)

その他随処)の局面のうちに属している。この著作のなした行動は、その著作がすべての現実的なものの持つ「全面的な労働性格」を、労働者という形態から、見え得るようにすることに、存していたし——変転した機能においてはいまなお存している——。そのようにして、最初は単にヨーロッパ的であったに過ぎなかったニヒリズムは、それがもつ全地球的動向にいて現れている。

(M. ハイデガー「有の問い」／『杣道』ハイデガー全集 第9巻, p.488)

ハイデガーが、E. ユンガー (Ernst Jünger; 1895-1998) 還暦の挨拶として送った「『線』を越えて」に対する評論であるので、1955年の著述である。近代の労働形態に西洋のニヒリズムの具体を見るユンガーの鋭い洞察に、然しものハイデガーも敬服する。特に、1930年以降の彼の「技術論」ではユンガーの「世界の動員としての技術」の脈絡を踏まえて技術の本質を語ることからも、大きな影響を受けたことは間違いない。ユンガーは、労働者の形態の最終段階では「最大の様式を持つ国家統治術と支配が、すなわち世界支配が可能となろう」(川合全弘訳『労働者 支配と形態』(以下『労働者』), p.194, 月曜社, 1932年)と示唆しているように、労働者として動員する「技術」は、国家統治術、端的には「国家」として現れる。

ユンガーが注目する技術において「機械は、人間同様、二次的な役割を演じる。機械は、この言語が語られる発声器官の一つにすぎない」(ibid., p.197)と語られるように、この技術とは個別の機械に関する知識のことではなく、人間を含む存在する「全体」が動員をかけられるかの「力」である。人は縷々、技術が「人間により制御されるべきもの」として語るが、ユンガーのそれは全く逆である。技術とは、世界を動員し人間を労働者として仕立て、存在する一切のものを技術的な機構全体の一部に組み入れる(支配する)力そのものである。それ故、「技術は自らの経済的な担い手、自由競争、企業合同、国家独占に担われつつ、それらを超えて次第に帝國的統一の準備へと進む」のであり、「いかなる分野においても、諸々の大計画の奉仕者として現れる。しかし技術の究極の使命は、何時いかなる場でも随意の程度に支配を実現する」(ibid., p.221)という。また技術による人間の支配は、技術時代を生きる人間によって、本質的に制御し難い。

こうして、独特の技術的手段を利用する者の身に起こることは、自由の喪失であり、大小の事柄に及ぶ自らの生活規則の弱体化である。自宅に電気を引く者は、ひょっとしたら従来よりも大きな便利さを享受するかもしれないが、しかし自分でランプを灯す者に比べて確実に独立性を失う。機械、技師、専門労働者を導入する農民国家や有色民族は、目に見えるか見えないかはともかく、自分たちが馴染んできた絆を、ダイナマイトで吹き飛ばすような仕方では爆破されて

しまう従属状態に陥る。(『労働者』, p.211)

さて、ユンガーが『労働者』を執筆するおよそ十年前の1919年に、テクノクラシーという概念が米国で誕生している。この術語の成立の歴史のなかにも、国家と技術の関係をみることができる。WikipediaのTechnocracyの項目で、そのはじまりが解説されているので、以下に私訳にて紹介する。

カリフォルニアの技術者であるウィリアム・ヘンリー・スミスが「科学者や技術者などの公務員を起用した効率的に運用する国民統治法」を説明するために、テクノクラシーなる言葉を1919年に造語したとの記録が残されている。しかしその言葉は造語される前にもしばしば使用されていたようである。スミスはテクノクラシーという用語を、『インダストリアル・マガジン(57)』誌の1919年「テクノクラシー 工業民主主義を確立するための方法と手段」という記事において使用している。説明のなかで彼は、工業民主主義：既存の企業もしくは革命を通じた決定の中に労働者を統合する運動、にも言及している。

1930年代には、ハワード・スコットの影響とともに彼が創設したテクノクラシー運動を通じて、その用語は価値エネルギー指標を活用する「技術的意志決定政府」を意味するようになった。スコットは、資源の利用可能性に応じて、erg(エルグ)やJ(ジュール)のような単位で呼称されるエネルギー証により変換された金額をもとにして、最適な国内エネルギー予算を算出し、北米人口に応じて均等に予算配分を行うことを提案している。(「用語の歴史」8/テクノクラシー, Wikipedia)^⑫

1919年には、工業民主主義の名の下で科学者および技術官僚による国内エネルギーの管理と国民統治の方法が記録されている。二十世紀初頭において、全体として存在するものの存在である技術が、国民・国家の全体を工業民主主義においていかに統合するのか、その動向を知ることができる。

5. 技術による世界動員の起源

5.1 人間による自然支配の基礎——カントにみる技術支配の基礎づけ

ところで、一切のものを技術的な支配に置くためには、その技術的支配の対象となる自然そのものの位置づけの変更が行われていたことも、確認する必要がある。技術による自然支配の条件は、I. カント (Immanuel Kant; 1724-1804) に

⑫ 原文を以下に表す。

William Henry Smyth, a California engineer, is usually credited with inventing the word technocracy in 1919 to describe "the rule of the people made effective through the agency of their servants, the scientists and engineers," although the word had been used before on several occasions. Smyth used the term Technocracy in his 1919 article "'Technocracy'—Ways and Means to Gain Industrial Democracy" in the journal *Industrial Management* (57). Smyth's usage referred to Industrial democracy: a movement to integrate workers into decision-making through existing firms or revolution.

In the 1930s, through the influence of Howard Scott and the technocracy movement he founded, the term technocracy came to mean 'government by technical decision making,' using an energy metric of value. Scott proposed that money be replaced by energy certificates denominated in units such as ergs or joules, equivalent in total amount to an appropriate national net energy budget, and then distributed equally among the North American population, according to resource availability.

(Technocracy, Wikipedia, 2025年7月25日参照, <https://en.wikipedia.org/wiki/Technocracy#Characteristics>)

よって既に予告されている。諸自然物の産出の可能性の認識について、「意図的に産出されたもの」と「目的として産出されたもの」の原因として判断する箇所に鋭い指摘を認めることができる。以下は、「第77節 自然目的という概念がそれによって私たちに可能的となる人間的悟性の特有性について」／『判断力批判』第2部目的論的判断力の批判」(344 seq.)(原佑訳『カント全集 第8巻』より)から抜粋し、自然支配の確立の基礎を追跡してみよう。

したがって、人間的悟性とは別の或る(高次の)悟性なら、自然のメカニズムのうちにも、言い換えれば、もっぱら一つの悟性がそのために原因として想定さるとはかぎらない一つの因果結果のうちにも、自然のそうした諸産物の可能性の根拠を見出しうるかもしれないことが否認されることはない。(346)

諸自然物の目的によってその産出の認識に至った認識か、もしくはその原因によってその認識を得たものか、区別を指摘する件である。自然の総体を認識するという過度な判断力の適応は、当然理性によりその誤用は慎むべきものとして議論される。しかし、人間を超えた「(高次の)悟性」ならば、自然のメカニズム全体を把握できる可能性が示唆されている。ア・ポステリオリに、しかもその全体の一部を経験的な諸法則からしか把握できない人間的な悟性ではなく、「至高の悟性」(362)であれば、ア・プリオリにその作用因からメカニズム全体が把握される可能性を「消極的に」示している。

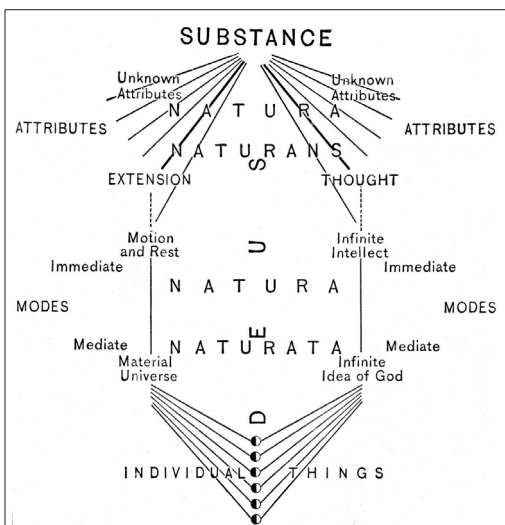
仮に、カントによる厳格な悟性の適応範囲を遵守したとしても、既に、暗黙の裡に、「自然はある産出の機構(メカニズム)」として把握されねばならないことが分かる。たとえその機構全体が超感性的基体(353)のうちに仮定されたとしても。自然の産出を、そのメカニズムとして把握することの重要性は、時にその原因が獲得不能であっても、そのように自然を定位することを自然探求の絶対的な条件として、カントは要求していたことにある。それ故、カントは自然の探求のために、次の条件を提示することになる。

自然のメカニズムを自然の産出において見落とさず、自然の産出の説明において見過ごさないことは、理性にとって限りなく重要である。というのは、このメカニズムなしでは諸物の自然本性をみぬくいかなる洞察も獲得され得ないからである。(354)

技術による自然支配の基礎条件は、自然の産出能力を「メカニズム」として措定する、この見通しのなかで開示される。自然そのものは、至高の悟性をもつ最高存在者(354)にのみア・プリオリに説明が許されないという(厳格な)条件

を付したとしても、メカニズムとして自然を知ること、精通していること、すなわち「テクネーとして」自然の産出が限界づけられていることには変わりはない。それ故、次に示す比喩は、人間の悟性の限界について人びとが考えがちな例として、またカントが建築(技術)を交えて紹介している点でも——建築における自然の模倣という問題を考える上でも——貴重な示唆に富んでいると言えよう。

この話は、建築を学ぶ者にとっても興味深いのは勿論、それ以上に、「自然の産出がある技術的なものとして、あるいは技術的な見通しの中で具現化しうる（カント自身は自覚していたかは兎も角として）可能性」を示している点で重要である。



カントがラインホルト宛て書簡で「私の判断力批判」として上梓されることを予告したのが1789年10月（出版は1790年）なので、18世紀末には、西洋における「技術による自然支配」の下描きが既に示唆されていたと言えよう。カントですら、自然の産出性は「メカニズム」として把握していたことは特筆すべき観点である。

照, <https://www.jewishencyclopedia.com/articles/14638-van-den-ende-franz>)においてもそれ(能産的自然)は DEUS の一側面として表現されており、さらに“Unknown Attributes”と書き込まれていることから、nature (これまでの文脈からいうと自然の産みだすこと)がテクネーにより把握されうるある種のメカニズム＝機構である、という発想(あるいは視点)そのものが欠落しているのである¹⁸⁾。

⑬ 自然のメカニズムとしての把握には、17世紀の物理学における数学的資料による充実を論じる必要がある。17世紀初頭では、物理学にとって数学は有用であることは認められていた。G. ガリレイ(Galileo Galilei; 1564-1642-1642)の金言には「自然という書物は数学の言葉で書かれている」が有名である。古典物理学を確立したことで有名な I. ニュートン(Isaac Newton; 1642-1727)のプリンキピア *Philosophiæ Naturalis Principia Mathematica* (自然哲学の数学的諸原理)は1687年刊行と考えると、17世紀中旬には自然の数学的な表象が本格的に開始されたと考えて良いであろう。

5.2 人間による自然支配の基礎

——カンシーの建築理論にみる技術支配の基礎づけ

建築家としての立場から、カトルメール・ド・カンシー(Antoine Chrysostome Quatremère de Quincy; 1755-1849)が『系統的百科全書・建築』(あるいは『建築歴史辞典』(1832))で建築技術の独創性(優越性)ともいうべきその本質を示したのは、遅くとも1788年に遡る。僅差であるが、カントより1年ほど早く自然を機構として捉えていた可能性を指摘できるであろう。

※こうして、この芸術「建築」は見かけ上は他の二つの芸術「彫刻、絵画」よりも素材に隷属しているように見えるが、実際は、これらの芸術よりも理想的で知的で形而上学的なものである。自然がこの芸術に対しては、到る所で類比しか与えないことをわれわれは見てきた。この芸術はその範型「自然」を模倣するというより、むしろ、その範型と対等に扱われるものである。この芸術は範型に付き従うのではなく、範型と併行にある。この芸術は見るものを造ることなど一切しないが、造るところを見るのである。それゆえこの芸術は、その模倣までもが独創的なものである。この芸術が学ぶのは効果などではなく、原因なのである。自然に匹敵するこの芸術の持つ秘密は、自然の歩み、自然の精髓、自然の手段の数々を学ぶことにまさしく限定される。他の諸芸術は、模倣したりあるいは矯正したりする創られた範型を持つが、建築は自らの範型を創り出す。この範型は自然の秩序であり、何処にも見当たらないが、到る所に存在している。※建築はこの範型をある時は大空の調和の中に、また天体の動きの中に、更にある時は人間や他の生物の賞嘆すべき機構¹⁴⁾の中に見い出す。建築の模倣の真の原型が存在するのは、宇宙を統御する至高なる知性の中なのである。建築は、世界の製造における最高存在のように、自らの作品において、それを小規模にしたかたちで作動する。すなわち、触知できる感覚的な範型のないまま建築は、秩序や配列の観念から諸々の巧みな適用を引き出し、この適用の効果をわれわれに感じさせるのである。

(白井秀和『カトルメール・ド・カンシーの建築論』, p. 51ff., ナカニシヤ出版, 1991年,

⑭ Wikisource で公開されている原典画像では、dans l'économie admirable de l'homme et des autres créatures (人間や他の生物の驚嘆すべき秩序のうちに)とある。白井は、カトルメールにおける構成概念の分析を通じて、エコノミーの概念に内包されていた構成概念が、コンポジションとして外化する過程を明らかにしている。この点を踏まえると、ここでの「機構」という訳語は、必ずしもカントが論じる自然のメカニズムと同義ではなく、むしろ部分と全体の組織性・秩序性を含むものとして理解する必要がある。(2025年7月25日参照, https://fr.wikisource.org/w/index.php?title=Page:Encyclop%C3%A9die_m%C3%A9thodique_-_Architecture,_T1.djvu/134&action=edit&redlink=1)

建築家は、至高なる知性、カントの言うところの最高存在のもちうる至高の悟性、をもつことはかなわない。それゆえに感性として決して握めない範型(自然の諸形式)の究極の原因である原型は、「宇宙を統御する至高なる知性の中」にのみおいて存在するとカンシーも示している。つまり建築家は、その原因そのものは把握できないとしても、(自然の歩み、自然の手段の数々を学ぶことを通して)自然の範型と匹敵する範型を自らに創り出すことにより、自然のもつ効果を自らの作品のうちに示すのである。

十八世紀末には、自然に対する人間の態度変更がおこったことをカントの批判哲学を通して確認した。この歴史的転換の兆しは先鋭的な哲学思想にのみあらわれたのではなく、フランス古典主義の牙城としても知られるエコール・デ・ボザール(Ecole des Beaux-Arts; 国立美術学校)の美術アカデミーの終身書記としてその理論的・政治的権威を揮ったカンシーの建築制作論のなかに垣間見た。頑強な古典主義建築思想の根底のただなかにロマン主義的な根源的な自然の概念のあらわれ、そして冷徹にも自然そのものを機構・秩序として把握する確かな近代人としての自然に対する態度をそこに見届けたのである。

5.3 主体の変容——人間機械論の起源

さて、「自然への態度」変更は、対象性としてその存在の相関者である認識の主体、つまり人間存在の主体性そのものの変容として確認される。intelligence は確かに、人間の本質的な一要素であることは疑うべくもなからうが、人間の本質の「すべて」として了解することには一定の保留が必要である。そもそも理性的な動物 rational animal ——「知性的な何か」——を人間本質として見なすのは、スコラ学における animal rationale すなわち古代に定式化された「理性を持つ生き物(ζῷον λόγον ἔχον)」として知られている伝統的な人間解釈に由来している。さらに、アリストテレス(Ἀριστοτέλης; 384–322 BC)が人間の幸福(εὐδαιμονία)を検討するにあたり「人間に固有のはたらき(ἔργον)」¹⁵を「ロゴスを有する(λόγον ἔχον)魂の活動(ψυχῆς εἶναι)」(『ニコマコス倫理学』第1巻7章(1098a14))とするこの議論こそが、先の解釈の直接の起源として確認できる。

しかし十七世紀に入り、この伝統的な人間の解釈である理性的な動物が極端な形 cogito ergo sum により遂行されることになる。この歴史的イベントについて、R. デカルト(René Descartes; 1596–1650)による真理の変更、すなわち「真理を確実性」とする読み替えが実行されたことは注目に値する。cogito がはなつ閃光の鮮烈さゆえこの転倒は表立つことはないが、表象する主体(subject/das Subjekt)性に立脚した近世の形而上学がこの転倒を地盤として開始されるのは論をまたないであろう。人間の思惟とはデカルト的な意味においても「表象する思惟」

¹⁵ エルゴン(ἔργον)という語のもつ根本性格のため、この語の邦訳は特に難しい。アリストテレスがこの語を基にエネルゲイア(ἐνέργεια)を造語し、エンテレケイア(ἐντελέχεια)、そしてデュナミス(δύναμις)と対比させ、存在者の存在を規定したことでも知られている(『形而上学』○巻第8章 b10あたり)。このエネルゲイアがドイツ語で「現実」を意味する die Wirklichkeit (wirken はたらく、作用するに由来する)に訳された経緯として、キケロ(Marcus Tullius Cicero)がエネルゲイアをラテン語の「現実態」actualitas (actus 行為、agere 行なうに由来する)に翻訳したことによる(木村敏, 村本詔司共訳/メダルト・ボス編:『ハイデガー ツォリコーン・ゼミナール』, p.130, みすず書房, 1991年)。

本文中ではエルゴンを「はたらき」として日本語訳をおいたが、渡辺邦夫・立花幸司共著『ニコマコス倫理学(上)』(p.58, 光文社古典新訳文庫, 2015年)による。ちなみに加藤信郎は「働き」(『ニコマコス倫理学』/アリストテレス全集13, p.19, 岩波書店, 1978年)、高田三郎は「機能」(『ニコマコス倫理学(上)』, p.33, 岩波文庫33, 1971年)と訳している。先の『形而上学』における件で、ウーシア(οὐσία)との近さにおいてエネルゲイアとデュナミスをアリストテレスが検討していることを踏まえると、このエルゴンとは本来的には「存在が自らを現実化する固有の遂行/形成の運動」を意味するであろうし、さらに「そのもの自身を形づくる存在」という意味で理解できるであろう。

であり、従って真理とは表象の「確実性」を意味しているのである。しかもこの表象の確実性は、あらゆる存在するものを計算可能なものとして表象する、つまり主体の前に(vor-)立てること(stellen)により、すなわち現前するもの(present)を主体に対して再度(re)、心的なイメージとして顕す表象すること(representation /die Vorstellung)により可能になる。つまり十八世紀人であるカントが自然をメカニズム〈として〉捉えることは全く正当な理由によるものである。

⑬ 濫澤龍彦：「人形愛 あるいはデカルト・コンプレックス」には次のような指摘がある。「この十八世紀の哲学者の唯物論的認識は、同時にまた、たとえ生命のない機械であっても、それが「技巧と数奇を凝らして作られ」さえすれば、一つの自律的な精神世界を成立せしめる場合がある、という確信をも示しているであろう。つまり、人間はあくまで一つの機械であるけれども、機械もまた、一つの人間存在になり得る可能性があるにちがいない、という形而上学的な夢を暗示しているのである。」(『濫澤龍彦全集 8』, 河出書房新社, 1994年1月, p.454)。

⑭ 濫澤は「十七世紀の哲学者デカルトは、その娘の死をひかく悲しんで、一個の精巧な自動人形をつくらせ、これを「わが娘フランシーヌ」と呼んで愛撫したという。……このような自己愛の変形した心理をわたしは「デカルト・コンプレックス」と名づけたと思う。わたしは思うのだが、これはコギトの哲学者にとっても、真に名譽ある命名というべきではあるまいか。むしろ、デカルトもまた、ラ・メトリーの先輩として、すべての動物を一種の機械と見なす立場をとっていたが、理性を有する人間はその限りにあらず、と考えていた。「肉体においては一切がメカニズムである、精神においては一切が思惟である」と彼は述べている。」(濫澤, op.cit, p.439)と指摘している。

⑮ 内閣府「ムーンショット目標 3 2050年までに、AIとロボットの共進化により、自ら学習・行動し人と共生するロボットを実現」の「ムーンショットが目指す社会」を参照のこと (https://www8.cao.go.jp/cstp/moon_shot/sub3.html, 2025年7月25日参照)。

ところで二十一世紀現在、人工知能AI (artificial intelligence)に関する議論はいよいよ喧しくなってきた。コンピュータ科学分野における発明家、科学哲学・技術哲学者、そして人工知能研究の世界的権威として知られるレイ・カーツワイル(Ray Kurzweil: 1948-)の提唱する技術的特異点が近づいているとの宣言(*The Singularity Is Near: When Humans Transcend Biology* (2005))において、その到来は2045年と予言されていたことも記憶に新しい。AIの名付け親でもあるジョン・マッカーシー(John McCarthy: 1927-2011)にせよAI時代の寵児カーツワイルにせよ、ともに計算機科学者(computer scientist)であることは、表象する思惟の時代を象徴していて感慨深い。

しかし、AIに代表される人間機械の可能性は、デカルトのフランシーヌ人形をはじめとして、十八世紀の唯物論者であるラ・メトリー(Julien Offray de La Mettrie: 1709-51)により「形而上学的な夢」^⑬として暗示されていたのである。すなわち十七世紀の偉大なる理性の時代のはじまりにおいて、既にまた同時に人間機械論がその影として告知されていた。啓蒙の光が強さを増すにつれて、その影である人間機械の可能性も色濃く実体化されていたのである。別言すれば、近世の理性を象徴する cogito と人間機械論とはヤヌス(Janus)神のごとく双面神であり、その生い立つ土壌こそが、自然をメカニズムとして表象する近代人の根本動性なのである。

伝統的な形而上学の終焉とともに現われた機械論的世界観という野火は、デカルトが当初「精神」として設定^⑭したファイアウォールを超え延焼することは定めであった。これを悲劇と呼ぶならば、近い将来AIはその運命の苛烈さに耐えかね、その母にして妻である cogito の形見を以てその両目を潰すことになるであろう。しかしこれを喜劇と呼ぶならば、「ゆりかごから墓場まで、人の感性、倫理観を共有し、人と一緒に成長するパートナーAI ロボットを開発し、豊かな暮らしを実現する」^⑮ムーンショットが目指す、燦然たる荘厳されたAGI社会の中で cogito は極楽往生をはたすであろう。

離大地性のはじまりを見届けるために、デカルト以降の「自然」に対する態度変更の歴史を通覧してきた。近世における形而上学のテクニクスを起動してきた一切の存在するものを表象する思惟は、その対象として現れる自然のみならず、その思惟そのものも「確実性」という真理のテクニクスの変動に

⑩ この桜井の発言を裏付ける資料については、管見の及ぶ限り確認ができなかったが、「第一次世界大戦後の世界で」とこのル・コルビュジエの言葉を前置きしていたことより、『レスプリ・ヌーヴォ』誌(1920-1925)を示唆していた可能性は高い。また同誌ではアメリカの大量生産方式を「近代の精神の純粋形態」として称賛していたことから、同誌からの引用である可能性は高いと思われる。

桜井は、テクノクラシーという理念誕生の歴史について、近代化過程において「学校」が果たした民衆の平等化＝均質化の社会的な役割を基軸にしなが、「テクノクラートの社会制御の夢」(p.171)として考察している(第二章および第三章)。テクノクラートとしてのル・コルビュジエの評価のためにも、以下にテクノクラシー創設までの歴史を桜井の論考に沿って紹介する。

工場の時間と空間を均質化しようと構想したその起源としてF.W. テーラー(Frederick Winslow Taylor; 1856-1915)が提唱するテーラー・システムに桜井は注目する。テーラーの思想は工場民主化というべきもので、「熟練を解体し、情報を集中管理しつつ、工場内のメンバーの平等化＝均質化を実現」(p.123)するためのカノンあるいはその思想を意味している。桜井はこのテーラーの科学的管理法を「工場の哲学」(p.126)と呼ぶ。

一方、テーラーの工場の哲学とともにH. ミュンスターベルク(Hugo Münsterberg; 1863-1916)がはじめて精密な科学による雇用者の「選別」の理論として「産業心理学」の誕生を論じている(p.126ff.)。「テーラーの場合はすでに工場で働いている人間たちをどう変えるか、というところに問題が置かれていたのに対し、ここ(引用者注：ミュンスターベルクの心理学)では、工場に入れる前に選別を行ってしまうという主張が提出されているのである。」(p.128)という。テーラーは「工場文化(ショップ・カルチャー)」の中で醸成された哲学であったのに対し、ミュンスターベルクの産業心理学は「学校文化(スクール・カルチャー)」による支配、すなわち技術エリートによる「効率の帝国」を目指していたと桜井は総括する。

1911年にテーラー協会の設立を皮切りに、テーラー主義の継承者としてH. L. ガント(Henry Laurence Gantt; 1861-1919)が現れる。ガントは、現在においても生産管理ツールとして有名なガントチャートの生みの親であり、労働者の生産性の測定法を開発したことで広く知られている。ガントは「一九一六年二月に「ニュー・マシーン(New Machine)」という政治的組織を創設している。

ここで、ガントは、工場のなかと同様に社会全体の効率化を企図する(桜井, op. cit., p.135)が、特にガントが影響を受けのが、T. B. ヴェブレン(Thorstein Bunde Veblen; 1857-1929)であった(p.136)。ヴェブレンの「技術者と価値体制」(*The Engineers and the Price System*, 1921)において、「技術者のソヴェト(Soviet) 論とも知られた「技術者による産業の支配」が積極的に語られていたという。このヴェブレンが1919年に「技術同盟(Technical Alliance)」をH. スコット(Howard Scott; 1890-1970)とともに組織したと桜井は解説している(p.138)。

スコットの独自のテクノクラシー哲学は、1930年代を通じて引き起こされた経済恐慌を克服するために「貨幣制度を変革し、「科学による統治——技術の力による社会制御」が実現されなければならないとまでスコットは主張していく」(p.140)ことになる。スコットがひき起こしたテクノクラシー運動は、全米に多くのテクノクラート集団を誕生させ、特にCCT(Continental Committee on Technocracy: テクノクラシーに関する大陸委員会)では1933年5月までに70の地方組織に25万人のメンバーを擁したとされるまで拡大したとある^⑪。1920～30年代にかけて技術者による「テクノロジーによる社会制御」が語られた。ヨーロッパ大陸では、第一次大戦前かテクノロジ信仰としてイタリア「未来派」は存在していたが、戦後アメリカリズムとして一般化されたのは、フォード主義(生産力向上)とテーラー主義(労務管理)が融合したもの、と桜井は説く(p.141)。

⑪ CCT Bulletin No.13によると“nation-wide membership of 250,000, six regional divisions, and more than seventy local units. (国内で25万人、6地区で70支部を超える)”(1933年5月22日)と発表されている。ただしDavid Adairの“*The Technocrats 1919-1967: A Case Study of Conflict and Change in a Social Movement*,” (M.A. Thesis, Simon Fraser University, January 1970.)によると、AdairはCCTを「小規模な革命運動(small-scale revolutionary movement)」と評価している点からも、25万人規模という桜井の引用には誇張が含まれていた可能性があることは考慮すべきであろう。このCCTの設立について、以下のブログ記事が詳しく報告しているの参考にされた。

より、AIとして変容をとげてきたことを目撃したのであった。デカルトが実体として措定した延長そして思惟は、どちらも計算可能性つまり確実性という真理のテクニクスのもと「表象されたもの」と化していく。しかしわれわれの世界とは、次のようなものであることはむしろ肌感覚として理解している——すなわち離大地性の「離-」の源はとめどもない、一切を呑み込む、表象化の自律的運動であり、この運動そのものが計算可能化の歴史として現前していることを。

6. 現代建築のテクニクス

——調和を築くこと

6.1 テクノクラートによる社会構想

「ル・コルビュジエはテーラーとフォードへの賛美を書いた。そして「自動車のような住宅」、「住宅は住む機械である」と高らかに宣言したのである」(桜井哲夫『近代』の意味——制度としての学校と工場』, p.144f., NHKブック470/日本放送出版協会, 1984年12月)とル・コルビュジエ(Le Corbusier; 1887-1965)のテクノクラート思想としての側面^⑫を桜井は指摘する。

近代の離大地性として、工業化という現象を、またその背景に計算可能性による確実性という真理のテクニクスをみえてきた。この世界史的な運動の前には、デカルトが実体と認めた延長そして思惟ですら、それ自身の絶え間ない表象化の波にさらされているのであった。改めて、離大地という運動がテクノクラシー運動として先鋭的なかたちをもってあらわれた二十世紀初頭に注目してみたい。この時代は産業構造、政治経済そして戦争、これら国家事業において労働者という名において知られる一切の存在の性格が全面的に展開した^⑬ことは先に示した。

さて、ル・コルビュジエの思想が「テクノクラートによる社会構想という一九三〇年代の基本的な潮流とみごとにふれあっている」(ibid., p.150)と評価する桜井の見解は、『プラン(PLANS)』誌の第8号(1931年10月)にル・コルビュジエが寄稿した「新しい都市が古い都

1932年、スコットをはじめとする技術進歩と経済変化の問題に関心を持つ人々がニューヨーク市で会合を開きました。彼らのアイデアは全国的な注目を集め、ハワード・スコットとウォルター・ラウテンストラウフによってコロンビア大学に「テクノクラシー委員会」が設立されました。このグループは短命に終わり、1933年1月に「大陸テクノクラシー委員会」(ハロルド・ロブ率いる)と「テクノクラシー社」(スコット率いる)という2つのグループに分裂しました。『AMERICAN MEDIA WIKI』, 2025年7月25日参照, https://jmedia.wiki/wiki/Technocracy_movement

さらに、このスコットによる「テクノクラシー社」(Technocracy Inc.)の突然の終焉については、21世紀現在において巨大テック企業の創業者の一人イーロン・マスク氏の祖父に当たるJoshua Norman Haldeman (1902-74) が1950年南アフリカ共和国に移動する前に関与していたことを示す興味深い報告が記されているので、次に、その要約を示す。

派閥争いが激しかった大陸テクノクラシー委員会は1936年10月に崩壊した。しかし、テクノクラシー社は存続した。1940年10月7日、カナダ王立騎馬警察はテクノクラシー・インコーポレーテッドのメンバーを非合法組織への所属の疑いに逮捕した。逮捕者の一人は、レジーナのカイロプラクターでテクノクラシー・インコーポレーテッドの元取締役であり、イーロン・マスクの母方の祖父でもあるジョシュア・ノーマン・ハルデマンであった。

因みにDarts & Lettersにおいて、産業時代において北米におけるテクノクラシー運動の概要を紹介しつつ、ジョシュアのカナダ時代におけるテクノクラート思想とともに、ポスト産業時代の寵児でもあるイーロン・マスクとの立場・思想との違いに触れており興味深い(Darts & Letters, The story of Technocracy, Inc. and its ties to Elon Musk (Technocracy Now, pt. 1), 『YouTube』, 2025年7月25日参照, <https://www.youtube.com/watch?v=xO-JX-jASIs>)。

①「事実上、ル・コルビュジエの都市計画に関する最後の著作」と訳者である山口知之が評する『三つの人間機構』(p.217, 鹿島出版会, 1978年)の第二章「労働の倫理学」の冒頭において、ル・コルビュジエは「この百年来、人間存在のなかにもたらされた機械の受遺者たる現代社会は、牧歌的でも好戦的でもない。労働にささげられた文化に突入する。労働はあらゆる社会機構に浸透し、何人もその宿命から逃れることはできない。……」(ibid., p.52)と論じている。

②ル・コルビュジエの従兄弟にあたるピエール・ジャンヌレ(Pierre Jeanneret; 1896-1967)が第二次大戦中にレジスタンス運動に参加したことで、一時期、ヴィシー政権に与していたル・コルビュジエと袂を別っていたという有名な逸話からも1930年代から終戦までル・コルビュジエが国家社会主義寄りの政治的立場を取っていたことが分かる。

③例えば、『輝く都市』において「だが目的は、国の中枢が、技術者が、使用者と指導者とが、いいかげんではない、健全な意図の下に一致協力し、現代の正しい歩みにしたがって、後向きではなく、前に向かって進んで行くことができる」(坂倉準三訳, SD選書33, p.204)とある。

市にとってかわる〜《輝く都市》に向けて(*Une nouvelle ville remplace une ancienne ville — Vers la ville radieuse*)」を根拠にしている。曰く「権威! プログラムをつくること。そしてプログラムに基づいて働くこと、プログラムを実現すること。つまり、秩序の祝福をひろげること」(桜井 loc. cit.)と。

このプラン誌の編集者として、フィリップ・ラムール(Philippe Lamour; 1903-1992 編集長)はジョルジュ・ヴァロア(Georges Valois; 1878-1945, ファシズムの先駆者)の協力者であり組合国家論(État corporatif)を掲げ、後のフランス国家社会主義的計画主義の首領、ユーベール・ラガルデル(Hubert Lagardelle; 1874-1958)は革命的サンディカリズム(Syndicalisme)から国家社会主義へ転向し、後にヴィシー政権下で労働大臣として労働組合組織と国家統制を結びつけた政治家・理論家、ピエール・ウィンター(Pierre Winter; 1891-1952 ウィンター博士)はル・コルビュジエの健康都市論の共同研究者にして身体・労働・都市を統合する「生政治的都市論」を展開する国家主義的衛生の思想家、といった肝いりの左翼革命思想・運動家の集まりであった。特に桜井が「奇妙な雑誌」として「レーニンの言葉とムッソリーニの言葉を同じページに掲げる」(桜井, p.146)と指摘しているが、左派系の計画経済理論と右派系の国家統制論を同時に推進する^②急進的な計画主義思想の雑誌であったことがうかがえよう。いずれにせよ1931年当時、ル・コルビュジエが都市計画を「政治的・社会的革命の装置」^③として見做していたと想像することはさほど難くはない。

ル・コルビュジエの機械文明に対する称賛は、著作のいたるところに見つけられる。機械が現代文明にもたらす革新性、将来性に対するオプティミスティックな明るい言葉こそル・コルビュジエの真骨頂と見るのが趨勢であろうが、彼の都市理論の形成期でもある三〇年代の言葉のなかにもペシミスティックな響きを聞きとることができる。「一八三〇年、まさに機械文明の誕生期」(坂倉準三訳『輝く都市』SD選書33, p.59, 鹿島研究所出版会, 1968年, 原題 *Manière de penser l'urbanisme* (以下MPU)) からおよそ百年間についてル・コルビュジエの総括を見てみよう。

全く重大な、深刻な、意味深い、しかもあらゆる領域にわたる一般的な事件が起こった。すなわち機械文明が生まれたのである。それのもたらした近代の諸大戦という苦い果実(MPU, p.21)

(アテネ憲章第8条)機械文明の世紀にはいつて、人間の行動や、その地上の分布、その諸活動に大なる混乱がもたらされた。高速度交通機関の利用による無制御な都市への集中化は、歴史上に例を見ない急激な、世界共通の変化である。都市の中に、混沌界が侵入してきた。(吉阪隆正編訳『アテネ憲章』SD 選書102, p.60, 鹿島出版会, 1976年(以下CA))

機械文明の最初の百年の苦悩のなかで、労働は、ところによっては、つぎの例証に窺われるように、良心と風土をそれが伴うあらゆるものと同時に漆黒にした。(山口知之訳『三つの人間機構』SD 選書138, p.52, 鹿島出版会, 1978年(以下TEH))

② ル・コルビュジエは、機械文明時代を二期に分けて捉えている。「われわれは現代における次のようなきわめて重要な事実をこの会議の作業の冒頭に据えることがぜひとも必要であると考え。すなわち、近代社会はその最初の百年間の征服、論争、混乱を通過して、一つの文明の性格をついに規定できる結論に至った。それは新しい住居のあり方である。新しい住居の創設によって機械文明の第二の時代は普遍的建設時期にはいるのだ。活気あり、希望あり、人間的な作品、〈本質的喜び〉をもたらす事業である。」(吉阪隆正訳『建築科の学生たちへの談話』/CA, p.145, 鹿島出版会, 1976年)

両大戦以前の機械文明の百年間^②を手放しで賛同していた訳ではない。むしろ機械のもたらす急激な、しかも抜本的な変化、破壊的な側面を見据えたうえでル・コルビュジエが機械への賛美を送っていたことには留意が必要であろう。そもそも彼にとって「機械」とは何を意味し、また期待していたのであろうか。

6.2 建築的中心課題の再定義

「『機械』という近代現象は人間精神の改造を断行する」(前川国男訳『今日の装飾芸術』SD 選書10, p.119, 鹿島研究所出版会, 1966年(以下ADA))の言葉からル・コルビュジエは「機械の教訓」をはじめめる。さらに「『機械』は人類全史において絶大なる重大性をもった現象であり、人間の精神そのものが今や『機械』によってその新しい鑄型に鑄こまれようとしている」(ADA, p.128)との断定的な表現からも機械の出現を「文明史的できごと」として捉えていたことがわかる。この章では『レスプリ・ヌーヴォ (L'Esprit Nouveau 新精神)』誌の共同編集者である放浪の詩人ポール・デルメ(Paul Dermée: 1866-1951)の語り部として、ル・コルビュジエは機械礼賛の詩を捧げる。

放浪と馬鹿騒ぎとのあげく、疲れ果て重い足を引きずる彼の前には、忽然として姿を現したものは直截な明快な未知の景観であった。

ポールは独語ちた。

「ああこれは何という変わり方だ！ 先生たちはみな俺を欺いていたのだ。半透明の母岩の中にはめ込まれた先生たちは何も見なかったに違いない。

今こそ俺は俺の周囲に組織され形造られ、磨かれて高らかに自己を宣言している世界を見る。現象の一切を統率する意識をもった一つの世界！」

放浪の詩人ポールは機械を発見した。(ADA, p.122)

「現象の一切を統率する意思をもった一つの世界」、未知の景観として立ち現れてくる世界とともにポールはまさに「機械」を発見する。機械とは、組織化し、形づくるものであり、またそのように形づくられたものである。さらに続けて「ポールはかつて「自然」のうちに見出して魂の高翔と歓喜の戦慄とを禁じ得なかった悪魔のように完全な正確な機能を「機械」の中に再発見した」(ADA, p.124)とも語る。機械と自然との本質的な類似性を語るル・コルビュジエの「機械」を単に即物的な工作物に「のみ」局限するのは明らかに無理であろう。

ポールを取り囲む全体は、自ずから組織化することにより形づくられる。その形成そのものが自らを一層の高みへと磨き上げること、またその顕われがそのままそれ自身の宣言となる——すなわち世界として宣言されるのである。この世界つまり現象の一切として現象する全体のなかに、ポールは確かに「意識」を直観したのであった。付会の説との誹りを免れぬであろうが、ここにデカルトの思索との偶然とは思えぬ一致が見える。

そしてこれらの機能(引用者注：この人間の身体の中に生じる諸機能)はすべて、理性をもたぬ動物がわれわれと等しくもっている機能なのである。ただし私はそこに、かの考えるはたらきに依存し、人間としてのわれわれのみに属する諸機能は、見いだしえなかった。このほうが機能がすべて見いだされるのは、のちに、神が理性的精神をつくり、私の述べたあるしかたでそれをうへの身体に結合した、ということをしてさらに想定したうえのことであった。(野田又夫訳「方法序説」／『方法序説・情念論』中公文庫, p.59, 中央公論社, 1974年)

デカルトは、人間の身体のなかに精巧な機能を観るが、神が身体に「理性的精神」を結びつけた²⁵とする。すなわちル・コルビュジエ(もしくはポール)も、機械のなかに精巧な機能を観るが、精神が機械に意識を結びつけた、と見ることもできるであろう。さらに、デカルトの「完全なる神の現存」の確信の議論(「方法序説」)についても同様の論理的な対称性を見いだすことができる。

デカルトは三角形の三つの角の和が二直角であることの明証性・確実性において、完全な存在としての神を確信する²⁶。同様に、機械の中に「悪魔のように完全な正確な機能」を見いだす「魂の高翔と歓喜の戦慄」において、現象の一切を統率する「意識」を確信する。ル・コルビュジエによる合理的精神により

²⁵ 「情念論」においてさらにこの件は詳細に議論される。17世紀人であったデカルトも ガレノス(Γαληνός: 129年頃-216年頃)の三つの精気(πνεύμα)論を踏襲し、瞳孔の収縮／拡大に関する論考を示している。人間の意志と瞳孔の開閉の運動が必ずしも一致しない点を踏まえて「自然は、瞳孔を広げたりせばめたりするに必要なしかたで精気を視神経のほうへおしやるところの、腺の運動を、瞳孔を広げまたはせばめようとする意志に結合せず」(p.129)と論ずる。

²⁶ デカルトの「完全なる神の現存」確信(デカルト, p.49)については、観念の明証性と「完全性の観念は不完全な私から生じない」という因果律の二つを使い説明していることに留意が必要であるが、この証明を形式的に次のように三段論法として再構築することも可能である。参考までに以下に示す。

「三角形の観念にはその三つの角の和が二直角に等しいことが含まれる」ことの明証的／確実であることを小命題、「完全な存在者の観念の中に現存ということが含まれている」を中項として、大命題である「完全なる者は神であり、現存する」ことが証明される。ちなみにアリストテレスのいう真の学問的論証(ἀπόδειξις)においては、中項(μέσων)が結論の原因(αἰτία)として追及される。

ものごとの本質を直観する態度に、デカルト的な直観的・本質的把握の類似性あるいは論理的な対称性が認められよう。

ところで「建築科の学生たちへの談話」は、吉阪によると1957年ミニユイ刊の再版のうちにアテネ憲章とともに加えられたという(CA, p.214)。この学生との談話のなかでル・コルビュジエは『レスプリ・ヌーヴォ』誌を創刊したおりに、「住居に根源的な重要性を与え、〈住むための機械〉と形容して、住居の総合的な完全な解答をもとめた」(CA, p.144)と述べ、次のように機械の語源を交えてその本質を披露している。

〈^{マシーン}機械〉という言葉は辞書によればラテン語とギリシア語に由来し、
技と策という意味を持ち〈ある種の効果を生み出すために組み合わせ
された装置〉だという。この策という言葉がとくにわれわれを問題
の核心へと導き、偶然性という——この動いて定まらぬもの——を
取り押さえ、そこに必要かつ十分な枠組みを構成することで生活を
うち立て、人間の幸福にすべてを捧げる形で、技をこれに動員でき
るということである。(CA, loc. cit.)

② この策と技について、ル・コルビュジエの詳細な言及は見いだされないが、文脈上この件以降の具体的な話により推定は可能である。策については住居に関する理論、いわゆる“une machine à habiter (住宅は住むための機械である)”であり、住居(新しい住居のあり方)を中核とした都市計画論が展開され、曰く「人間が椅子から立ち上がるやいらないや、都市計画はすべてに関わりをもつ」(「建築科の学生たちへの談話」, p.149)と述べられている。

一方で、技については「建設の技にはさまざまな配慮を要するが、なかでもこれまで虐げられてきた〈同胞〉に注意を集中し」(loc. cit.)とある。その直前にはオーギュスト・ペレとル・コルビュジエ自身が紹介されており、これらの同胞は、特に「設計・施工者で施工・事業者の系譜に属しており」加えて「一九〇〇年頃コンクリートと取り組み、建築に有効に導入せしめた」とある。つまり技とはコンクリート造などの技術革新の系譜を指している。

ル・コルビュジエが参照した辞書そのものは不明である。しかし文字通りフランス語 machine の語源は、ラテン語の machina およびギリシア語の μηχανή として特定できる。また μηχανή のフランス語訳として moyen (手段)、expedient (方策)、artifice (工夫・仕掛け)、dispositif (装置・仕掛け) が相当する。

これらの説明からも、ル・コルビュジエのいう機械とは、第一義的に製作された工作物のみを意味すると断定することはできない。「問題の核心へと導き」、「必要かつ十分な枠組みを構成する」技(moyen)つまり、住居をル・コルビュジエ的に機械として捉えるならば、建築家が直面するのであろう様々な生活の諸問題を組織化する策(expedient)にして、策を立てること、同時に建築家の技術の総動員により住居としてその組織立てられたものを具現化する技を意味する²⁷と見えよう。つまり機械の第一義には工作物を意味しないこと、そのため彼の機械という概念は、住居、都市、労働、社会、そして自然にまで幅広く適応されまた包含することができたと言えよう。

つづけて「輝く都市」へのル・コルビュジエの言及が続く。

一九三五年に『輝く都市』が出版された。〈輝く〉という言葉は偶然添えられたのではない。機能的なものをこえて意識に触れるからだ。なぜならこの事項(現にわれわれの生きている驚異的な事件の数かず)はすべて意識にかかわり、経済や技術に優先して、その正しい復権によってのみとどのつまりわれわれの作品の計画要綱も作成することがで

④ 読解の過程は煩雑のため注記に示す。本論で示した引用の後半の読み取りを進める。「経済や技術に優先して」とは先の「機能的なもの」を意味しているとしたら、この機能的なものを超えて、あるいは優先するものとは「その復権」を指していると解するのが至当であろう。つまりこの論理的な等比関係からも、引用後半は「経済や技術に優先して、〈意識の正しい復権〉により計画要綱も作成できた」との読み取りが成り立つ。計画要綱の作成は翻って、この談話がなされた1942年現在においてル・コルビュジエが問題にしている「意識」が、復権を要求するような、ある種の没落、頹廃、棄却などのネガティブな状況に置かれていたと解釈できるであろう。ちょうどこの文脈に当たるのが以下の語りである。

金銭の力関係で引き起こされるさまざまな要素、利益競争、性急によって、人間をその尊厳から引きずり落とし、屈従によって押しつぶし、品位ある生活を求める根本的権利を忘れさせるよう相場を決めてしまったような今日の住居形式を容認することはできない。諸君も承知のように、パリの美術学校では、建築教育の最も大きな施設だが、いまだかつて住居が講義題目に現れたことはないのだ。あらゆる人びとの生活を形づくるのに注意が向けられていないのだ。」「[建築科の学生たちへの対談]、p.143
なお、下線部は引用者による

この引用からも明らかのように、フランス最大の規模を誇るエコール・デ・ボザールの建築教育において、ル・コルビュジエが建築の最重要課題とした「人の生活を形づくることへの注意」という意識への涵養が全く手つかずなことを糾弾している。まさにこの喫緊の状況を鑑み「計画要綱」すなわちアテネ憲章を提唱したのである。

きたからである。(CA, loc. cit.)

「輝く」という語句は都市という言葉を美しく飾る修辭語ではない。輝くは「経済や技術」つまりすべての「機能的なもの」を超えて「意識」に触れることをいう。つまり輝くとは意識への道であり、輝くことを通して意識は世界を統率するとも言いかえられるであろう。さらにここで語られている意識とは、この「住居の建築」の章を読み解いていくと^⑤、「あらゆる人びとの生活を形づくるもの」への「注意」であることが分かる。この具体的なヴィジョンについて、ル・コルビュジエは冒頭で、次のように宣言する。

定住するすべての社会の中に、出現するすべての文明の中に、正当な場を占めること。まず人びとを家に住まわせ、天候不順や泥棒から守り、とくに住戸の周囲に平和をもたらしようにあらゆる措置を講じ、自然の法則に反する危険を犯(する)ことなく調和した生存の時を続けられるようにすること。(CA, p.143 下線部は引用者による)

「自然の法則に反する危険を冒すことなく」とは「調和した生存」が満たすための単なる条件と読むべきでない。むしろ同語反復的なつまり定義として読み取る必要がある。すなわち、意識とは「自然の法則に即した調和した生存の時を続けられるようにする」ことであり、「住居に根源的な重要性を与え、〈住むための機械〉と形容」した動機そのものである。ゆえにル・コルビュジエは「建築的関心の中心に人間を再び据えた」(ibid., p.144)という帰結に至る。この意識から「輝く」に象徴された、あらゆる機能的な解決、技術的な挑戦、総じて「機械」がある。

彼は、「新しい住居の創設」によって機械文明の第二の時代、すなわち普遍的建設期に入ると明言している。「技術的問題(合理主義と機能主義)を超える事業である。新しい意識の純粹かつ本質的、根本的な発現である。「今後は新しい意識の基づく観点なしは、建築および都市計画に関する諸問題を考えることはできない」」(CA, loc. cit.)といわれる。

ところで談話のあった1942年に、アカデミー(académie)によるはるか周回遅れの概念が「一つの大発見」としてフランス建築界において称揚されている状況に、然しものル・コルビュジエもよほどの驚愕を覚えたようである。「ドミズム、すなわち住居に関する建築科学」の話題が皮肉を交えて国立美術学校の学生らに披露されるが、彼自身はこのドミズムそのものを揶揄しているのではない。

およそ二十年前に公開されたル・コルビュジエによる建築の革新の福音はついにとどかず、いまだacadémieとCIMAを中心としたmoderne(現代派)との建

29 この談話にある「研究のアトリエ」では、「国際連盟会館の設計の後、一九三〇年ごろ、諸君の間の一グループが、いっしょに美術学校にアトリエを開いてくれと私に頼みにやって来た。」(『建築科の学生たちへの談話／「アテネ憲章」, p.176)とある。ボザールは1920年代に「アトリエ・リーブル(自由アトリエ)」制度の拡充にともない学部で著名建築家を招聘し学生指導を依頼する動きが活発化していた。1924年にル・コルビュジエ自らがパリのセーブル通り35番地にアトリエを開設した年にボザールでのアトリエ開設依頼があったこと、また国際連盟会館の設計競技参加が1927年であったことから、少なくとも1942年までには二度のアトリエ開設依頼があったと見るべきであろう(この談話の緒言にあたる「今日の言葉」には1957年にもアトリエ開設依頼があったことが示唆されている)。ちなみにこのセーブルのアトリエについてル・コルビュジエは「セーブル街の私のアトリエは、いつの間にか二百人近くの若い建築家たちの世界中からの集合中心地になっていた」(ibid., p.179)とその盛況ぶりが語られている。

この談話があった1942年はル・コルビュジエにとって政治的戦略が破綻した年として極めて象徴的である。談話の中でも語られているように、アトリエ開設依頼を断ったおりに「私の先輩であるオーギュスト・ペレに話を持っていくように勧めた」(loc. cit.)とある。ペレが自由アトリエをボザールに開設したのが奇しくも1942年、新学年が開始されるのが10月であり、加えて「一九四二年一〇月一七日 パリにて」(ibid., p.180)との談話の奥書が記されているので、この談話はペレのアトリエ開設の時期とちょうど重なる。つまりこの1942年は古典派復権を象徴する出来事として受け止められた可能性もある。

加えて政治的な状況としてアルジェ計画が否決されたのも1942年6月14日(推定)であった。アルジェ総督による規定の根拠になった「北アフリカ土木(建設・公共事業・建築都市計画)」6月4日号には、ル・コルビュジエの発言として「偉大な人間というものはよいものだ。凡庸さのほうが望ましい。……歴史や、芸術的崇高さや、家々を打ち壊さなければならない、教授たち、歴史家たち、シェクスピア、ゲーテ、アシル(シラーと言いたかった)、ワグナーはくそくらえ、ベートーベンも」(ibid., p.178の原注1)が記されている。ナチスの傀儡政権であったヴィシー政府下において、このようなゲルマン文化の神聖性への侮辱は大きな政治的スキャンダルであり、ヴィシー政権への協力の立場をとったル・コルビュジエにとっては、深刻な打撃として受け止められたと考えられる。

さらに同年パリのモランセ社から「建築について」と題された本が国立博物館長、国立高等美術学校長、ルーブル校教授、ルイ・オートワールの共著で発表され、「フランスでは、アレクス・ド・サンジェ氏はル・コルビュジエ氏をボルシェイズムの先駆と見做している」(一六九頁)(loc. cit.)との酷評に対して皮肉交じりに注記している。明らかにル・コルビュジエを左翼・革命思想の象徴として描く政治的困難であり、ヴィシー政権の文化政策(反モダニズム・反左翼)に抵触させた嫌いも指摘できるであろう。

この談話の緒言にあたる「今日の言葉」(1957年)には「それは占領中のことであった。フランスでは、近代建築は悪しき精神の担い手、混乱の部分的責任者、すなわち近代建築は伝統を裏切り、いかげつしい世界を展開したからだと告発された。このような避難はナチス当局からと同時にモスクワからも投げつけられた」(ibid., p.133)と1942年当時のル・コルビュジエの政治的コミットがまさに四面楚歌の状況に陥っていたことがわかる。

ヴィシー政権は建築家を国家管理下に置くため1940年に建築家協会(Ordre des architectes)を創設したことをきっかけにル・コルビュジエの接触——この接触により従兄弟弟のピエール・ジャンヌレとの協力関係は決裂する——がはじまった。しかしアルジェ計画の拒否にみられるように1942年には当政権に対するル・コルビュジエの影響力は完全に排除され、一年八カ月にもわたる政権への接触が徒労に終わるのが決定的になるのが、まさにこの談話が行われた時期にあたる。

連合国によるモロッコおよびアルジェ上陸作戦であるトーチ作戦が実施されたのが同年11月8日であり、その三日後に連合国に対する地中海防衛強化のため、イタリアとナチス共同によるアントン作戦が実施されるとヴィシー政府は完全にナチスの支配下に、そしてフランス自由地域もナチスの検閲下に完全に置かれることになる。

これらの状況をふまえると「一九四二年という不幸な年に一つの大発見」というフレーズに込められたル・コルビュジエの苦渋の思いが実感できるであろう。ヴィシー政府下では国家再建を掲げ都市計画を重視した状況を好機ととらえ、彼の都市計画構想を実現するために「国家権力」が唯一の実現に向けたアプローチであったとル・コルビュジエが考えていても不思議ではない。

ちなみに1947年に出版された『輝く都市』の二章は「一九四三年およびそれ以後」である。その冒頭に「一九四三年という年は、特にこれと目立った性格はないが、それまで積み重ねてきた来た誤謬に革新の曙の光が見え始めた方向転換の年だとしても良いであろう」。(坂倉準三訳, p.19)と記されており、先に論じてきた「一九四二年という不幸な年」というル・コルビュジエの発言に対する傍証となるであろう。

築界分断という停滞状況は解消されない。こうした機械文明第二期の躍進を妨げている状態に苛立ちを覚えているのである。この1942年という年²⁹はアカデミーが喧伝するような「建築科学の提唱の段階」にはすでになく、CIMAでの長年にわたる国際的な研究実績をもとに実践的な都市計画大綱としてアテネ憲章がすでに公布され、いよいよ人が生きる領域全体を問題として輝く都市の社会実装が世界中から待ち望まれていた時期であった。

さて建築の根本課題がル・コルビュジエによって再定義されたが、その建築術の実践とはいかなるものであろうか。再度、「新しい住居の創設」の問題にもどることにしよう。ル・コルビュジエは若き建築家へ、住居へ携わるこそがこれからの機械文明世界創設への献身であると、実直にまた力強く鼓舞するのである。

建築に携わる者にはこれを天賦とすることを要求していることを。住居に奉仕することは(住居は人を守るほかに仕事も、物品も、制度も、思想も保護する)、建築が愛の行為であって、演出ではない。権威を失墜した文明が新しい文明に変容しようとするこの時代にあって、建築に打ち込むことは、宗教にはいること、信ずること、身を捧げること、おのれをゆだねることである。(CA, p.149)

「住居への奉仕」とは、「人間を再び建築的課題の中心に据える」というル・コルビュジエの再定義を踏まえれば、まさに建築術の実践そのものである。機械文明の時代の到来に向けてその実践に「打ち込むこと」は、新しい世界・文明を拓くために、「身を捧げること、おのれをゆだねること」であり、それは宗教的实践と酷似する

⑩ 愛 (amour) と精神 (esprit) のフランス語のもつ核となる概念について、ヴェイユの議論が参考になるであろう。「真実にして純粋なる愛は、それ自体が真理の霊 (エスプリ) である。それは《聖霊 (サン・テスプリ)》である。霊 (エスプリ) と翻訳されるギリシア語 [πνεῦμα] は、文字通り、火の息吹き、火と混じた (ママ) 息吹きを意味する。そして古代においては、今日の科学がエネルギーという語で指し示す観念を指していた。従って、《真理の霊》とでも表現すべきものは、真理のエネルギー、活動する力としての真理を意味する。純粋なる愛、どんな代償を払おうと、どんな場合であろうと、虚言をも誤謬をも拒否する愛は、この活動する力である」(『第三部 根をもつこと』／『根をもつこと』, p.334) とある。ル・コルビュジエのこの「愛の行為」という意味は、まさに精神 (esprit) の現実の活動状態 (ἐνέργεια) と言わねばであろう。

⑪ 『アテネ憲章』翻訳者の吉阪は、『訳者解説』において「一九三五年の『輝く都市』の出版以前に彼が都市計画にかかわりのある案」(p.186) とあるように、初版は1935年である。戦後に書籍として加筆・修正を加え、*l'Architecture d'Aujourd'hui* (『AA現代建築』社から1947年に出版されたものが、現在書籍版として普及している。

⑫ Gilliard の日本語表記は、坂倉準三の訳によった。ル・コルビュジエはジラルルの理論を援用しつつ、都市機能を三つの道具 (機能性) に分類して、三つの都市機能 (経済的、家族的、精神的諸施設) を弁証法的に、これらの機能を止揚するジン・テーゼ (Synthese) として「生きる喜び」をル・コルビュジエは提示する(『輝く都市』, p.69)。

という。つまりその実存はまさに「愛の行為」^⑩として宗教的な受難 (建築界受難の時代) を引き受けるパッションにもなり得るのだろう。勿論、学生への薫陶という意図はあるにせよ、ル・コルビュジエにとって建築術の実践とはまさに、機械文明中興という歴史的事業を己の任として建築することにより引き受ける覚悟性、このことを本質的に意味しているのであろう。

6.3 マスター・ビルダーもしくは建築家

『輝く都市』は、1933年の第4回CIMAでの主要テーマ「機能都市」において「“輝く都市”理論として、……主要課題に取り上げられ、世界の新しい世代の建築家たちの研究の対象となった」(坂倉準三「旧版あとがき」/MPU, p.270ff.) 研究の集大成であることは言うまでもないであろう。“輝く都市”理論のはじまりは、『ユルバニズム』においてル・コルビュジエ自身が明かしている。「私は、技術的分析と建築的総合によって、人口三〇〇万の現代都市の計画をたてた。その制作は、一九二二年一月、パリのサロン・ドートンヌ展に出された。……続いて都市計画の新しい原理を表明するためにこの本を書くように求められ」た (樋口清訳『ユルバニズム』SD 選書15, p.152, 鹿島研究所出版会, 1968年(以下U)) とある。

いずれにせよ、『輝く都市』が三百万人のための現代都市論 (1922年) につづくヴォワザン計画 (1925年) 以来、ル・コルビュジエが最も深くそして精緻に現代都市の具体的な可能性を展開した最大の理論書 (1933-35年)^⑪であり、坂倉の「彼の畢生の仕事である。彼の不世出の天才のすべての建築活動がこの基の上に行っている」(坂倉, p.271) との評価が、まさにこの書の重要性を示している。

この本の扉の頁にはプラトンの『饗宴』の一節が引用され、続く第一章の「アスコラルの介入」の最後にはデカルトと E. T. ジラルル (Gillard)^⑫ の言葉が格言として引かれている。

〈自然が作ったものと、人間精神が作ったものとの間には統一がある〉(デカルト)

〈自然の絶対の主権を認めたデカルトは、理性の権利にある限界を置き、また言葉の優先権にも限界を置いた。大切なのは個々の言葉ではなくて、現実そのものなのである〉(MPU, p.16)

ジラルルについて具体的なことは未明であるが、ル・コルビュジエによる原注として「Dr. E. T. Gillard: Synthèse universelle (宇宙的総合)」(MPU, p.15) とある。この書き込みからもデカルトの研究者というよりは、むしろ自然の全体である宇宙と人間精神との総合や統一を志向する思想家であったことがうかがえる。またジラルルからの引用として〈……すべて帰するところは、人間精神に宇宙の秩序を尊重させようとする自然の反応に他ならない。〉(MPU, loc. cit.) との件からも、ル・

③ デカルトの自然に対する理解を示す言葉として「自然の主人かつ所有者 (les maîtres et possesseurs de la nature)」(野田又男 訳「方法序説」第6部／『方法序説・情念論』中公文庫, p.75, 中央公論社, 1974年)の句は有名である。佐藤真人は「著名な科学史・文明史研究者の伊東俊太郎氏はたびたび、現代の環境破壊の淵源となる思想の一端をデカルトに帰している。氏によれば、デカルトの機械論的自然観は、「自然の人為的再構成、操作、支配を通じて人間中心の近代文明を作り上げることに貢献してきた」ものであり、そこにこそ「自然に対する態度の脱倫理性のひとつの根源がある」(『デカルトの『自然の教え』とは何か——ストア派の自然本性概念との対比で——), 日本倫理学会専門問対話 WG, 2026年7月15日参照, <https://sites.google.com/view/jse-dialogue/authors-note/2020sato>)と紹介し、「デカルトはしばしば、自然の精細と、それとは対照的な人工物の粗さについて述べている。デカルトにとって自然は研究し、解明し、そこから学んで模倣する存在でこそあれ、「再構成」したり「操作」したり、ましてや「支配」するものではなかった」(loc. cit.)と解説している。

「1645年9月15日エリザベート宛書簡」ではデカルトは精神の本質について「精神が身体なくして存続し、身体よりもはるかに高貴である」(野田訳「書簡集」／『方法序説・情念論』p.263)という精神の本質を理解することが「死を恐れることのないようにさせる」と説く。その実践として「人が神の作品を正当に判断すること」すなわち「宇宙の延長についての広大な観念をもつこと」(loc. cit.)を推奨している。

しかしもし宇宙の広大な観念をもてず「これら天界のすべてが地球のためにのみつくられ、また地球は人間のためにのみつくられて」と考える場合、「ひとをしてややもすれば、この地上がわれわれの主要な住みかであり、この地上の生がわれわれの最上の生である、と考えさせるからであり、また、われわれの中に真実に存在する完全性を認識するのではなくて、他の被造物に、それらが実はもっていないところの不完全性を帰属させることによって、われわれ自身を他の被造物の上に置くようになり、不都合な傲慢な心をいだいて、神の計画に介入しようとし、神とともに世界を導く役割をもとうとするに至り、そこから無数のむなしい不安や不満が生まれる」(loc. cit.)と説く。

佐藤の説明を借りるならば、人間が自然を「再構成」したり「操作」したり、ましてや「支配」することつまり「神の計画に介入する」「神とともに世界を導く」などということが起き得るのは、自然が神の作品であることを理解せず、「想像された空間のみしか考えない」場合であり、デカルトを単純に自然支配の思想家として位置づけることには留保が必要である。

少なくともデカルト自身は、人間が神の立場から世界全体を導こうとする態度を傲慢として戒めており、自然を神の作品として理解する倫理的契機を保持していた。この点で、デカルトの思想を一義的に「人間中心の近代文明」の思想的源泉とみなす解釈には再検討の余地があるだろう。

ちなみに第7章でも取り上げるシモーヌ・ヴェイユの断片においては自然に対する科学のあり方を三種に分けている。

断章3 宇宙を神の作品とする。宇宙をひとつの芸術作品とする。

これがギリシア科学の目的(オブジェ)である。

古典科学の目的。われわれが自身のうちにみいだす知によって「自然の主人にして所有者となる」(ギリシアの神とはまったく異なる神への同化)。(ア・プリオリな再構築。解読された暗号文にもとづく未知の暗号の類推。)

現代科学の目的。代数学の言語で自然の規則性を表明する。自然を利用するために。

目的はひたすら劣化の一途をたどる。

進歩のあるところ、水準は必然的に劣化する。「術は果てなく、生は短し」。

(富原真弓訳, 「美」／「重力と恩寵」岩波文庫, p.255, 岩波書店, 2017年)

④ フランソワ・マリイ・シャルル・フーリエ(François Marie Charles Fourier: 1772-1837)。Wikipediaによると『四運動の理論』(Théorie des quatre mouvements et des destinées générales)を執筆・刊行する。

「コルビュジエは都市計画という営みに「宇宙的総合」のヴィジョンを重ねていたのであろう。

さてここから、先のル・コルビュジエによるデカルトおよびジラールからの引用について見てみよう。「自然が作ったもの」と「人間精神が作ったもの」との間にデカルトが「統一」を論じたとの出典については管見のおよふ限り探し出すことができなかったが、この言葉を敢えて巻頭にのせた真意に注目すべきであろう^⑤。このデカルトの格言(「デカルト的精神」と言い換えられる)とは、ル・コルビュジエが文献学的な精緻さを以て解釈した言葉ではなさそうである。このことは先のジラールの格言「大切なのは個々の言葉でなくて、現実そのものなのである」にも示されている。つまりジラール風に言えば、建築家もしくは都市計画家として、「デカルトの思惟をそのように捉えたという現実」こそ切なのである。このデカルト的精神は文脈にあわせて、繰返しこの『輝く都市』に引用されている。

自然の中にも人間の中にもあるこの統一、この法則こそが仕事に生命を与えるものなのである。法則が認識され、容認されれば、寄生物や残滓物などは何らの生存権を持たなくなる。(MPU, p.66)

E. T. ジラール博士は、西洋の知恵と東洋のそれとを対比させつつ、生きる喜びを探し求め、自然と人間との間の接触を可能にする調和の高次方程式を追究している。

機能主義時代の最初の空想家であったシャルル・フーリエ^⑥も、(すでに一〇〇年以上も前に)その社会構造の基本尺度として、生きる喜びということを採り上げた。

デカルトは、宇宙的秩序の法則を表明し、もって人類に、新しい時代(近代)への見透しを与えた。〈自然が作り出したものと、人間精神が作り出したものとの間には、一つの統一がある〉(MPU, p.117, ゴシック体は原文のまま)

この中でフリーエは、宇宙には物質的、有機的、動物の、社会的運動の4つの運動があるとし、彼は社会的運動において物質的世界におけるニュートンの万有引力の法則に匹敵する「情念引力の理論」を発見したと宣言する。フリーエはこの情念引力論に依拠した1620人から成る農業アソシアション(association, 協同体)、すなわちファランジュ(フランス語版)の建設を提唱した」とある(『シャルル・フリーエ』[Wikipedia]、2026年7月15日参照、<https://ja.wikipedia.org/wiki/シャルル・フリーエ>)。

④『建築科の学生たちへの談話』においてル・コルビュジエは「風景は建築構成の基盤である。私はこのことを一九一一年にリュックを背にプラハから小アジア、ギリシアに長い旅をした時に知った。私は風景の中に設定された建築を発見した。いやそれ以上であった。建築が風景を表現し、その場所の主となった人間の演舌であり、雄弁であったのだ。……アルジェにおいては、たとえば高さのもつ建築的資源がこれに相当する。海辺からフォール・ランブルールへの二〇〇メートルをぐんぐんと登ると海は徐々に広がりを増して行き視界の最上段にまで至る。カピリアの山々が現われ、やがてアトラス山脈も。なんと詩情を秘めた光景であろうか」(CA, p.153)

デカルト的精神——自然と人間とは、統一と調和を保っているものであって、自然の外に拵えものの社会があるのではない。

アルジェの概略図は、二つの文明の歴史が相会する都会の都市計画を代表するものであって、そこは、地形の変化と美しい風景とに富み、その地勢は二つの大陸に跨っている。その未来は洋々として果てしなく、明確な原理に基づく堅実さと、人間と自然、毎日の現実と高い意志との見事な協同によって生み出された多様性と、柔軟性を予告してくれる。

行政責任者、建築家兼都市計画家、技師は、一国の運命を左右すべき都市の運命を、その手の中に握っているのである。(MPU, p.196f.)

以上に見てきたように、ル・コルビュジエがいうデカルト的精神において、自然的なものと人間的なものとが統一されて保持されている。この統一については、文脈に応じて法則、生命、調和そして生きる喜びとして言い換えられている。この「統一」の状態はアルジェ計画を例にとりながら、自然と人間が織りなす多様な社会、地形の変化に富む美しい風景^⑤として語られている。

ところで『今日の装飾芸術』(1925年)は「告白」の章で締められている。この終章の意図についてル・コルビュジエ自ら「君はよろしく過去二十五年間——詳しく言えば、深刻な進化の道程において加速度をもって施転(マツ)しつつあった時代における、君の懷疑と飛躍とを人々にしらしめなければならない。君は君自身を説明し、君の思索の理論を説明しなければいけない。君は読者に対して君の著書の終わりに一つ告白を公表することを許して貰うべきだ」(ADA, p.217ff.)と、劇中劇よろしく独白がはじまる。

ル・コルビュジエが十代半ばにわずかにとどかぬ頃「エロイコ・コンケラン(Heroico-Conquerant)主義運動にたずさわり装飾芸術のみが神聖な仕事であると先験的に容認していた」(ADA, loc. cit.)という。この頃、師事していた先生が次のように彼に語ったという。

「ただ自然のみが人間に靈感を与えるのだ。自然のみが真だ。そして自然のみが人間の仕事の最後の支えである。しかし現代の風景画家の単に外観だけをかくやり方は決して真似してはいけない。自然をめぐる因果を学べ、そして形を探り、生命の進展を究めよ。そこから自然を総合して、装飾(ornaments)を創造せよ」と。彼は小宇宙ともいふべき装飾に対する崇高な観念をもっていた。(ADA, p.219)

十代半ばのジャンヌレ少年のもつ創造の理念は、すでにル・コルビュジエその人であった。自然に敬意を払い、内在する秩序そして生命を見いだす。さら

に自然を総合する態度は、表現こそちがえど、先に見てきた「デカルト的精神」の神髄と言っても過言ではなかろう。ル・コルビュジエにとって、秩序化、組織化、標準化……そのものが目的でなかったことを伝える貴重な逸話である。況や自然のもつ大いなる秩序を見出し組織化することで自然を支配し、制御するという近代人的な欲望とも凡そ無縁な話である。

装飾芸術に与していた青年期から、創作の先にあるものは生命であった。前節において「輝くは「経済や技術」つまりすべての「機能的なもの」を超えて「意識」に触れる」の言葉に注目してきたが、ル・コルビュジエの原体験を通じて、われわれはこの意識が指し示す質について垣間見ることができる。すなわち生命であり生きる喜びであったと。これはジラール博士が探求した「自然と人間の間の接触を可能にする調和の高次方程式」すなわち「生きる喜び」にもびたりと符合する。

本章の前半において、われわれはテクノクラートの都市計画家としてル・コルビュジエを追跡してきた。フォードの生産システムあるいはテーラーの生産管理システムを称賛したことにも触れた。政治的にはサンディカリズムの急進的社会改革思想の活動家と見なされていた頃も同じ「デカルト的精神」をそのうちに宿していたとするならば、テーラーへの称賛は単に労働管理システムとして効率化の側面のみを評価していたとは考えにくい。むしろ自然の中にその秩序性を見出したように、労働環境に内在する労働の秩序性ないしは組織性をル・コルビュジエは称賛していたと見なすべきであろう。

いやしくもテーラー自身も若いころ職人環境の中で経営を学び、その哲学は「工場文化」の中で醸成された³⁶ことを忘れてはならない。

工事場を工業化すれば、機械工の作業班のように繊細で知的な職人の作業班をつくることができる。

機械工は二〇年前に始まり、職人世界の上の階級を成している。……建物の工賃はテーラー式管理法によって分類されよう—各人は、能力に応じて、なされた仕事の報酬を受け取る。(U, p.166)

私は工業の圏内に巻き込まれている自身を発見した。

機械、テイラー・システム、原価、支払期日、貸借表。

大戦後の技術研究は至るところに組織と創造との夢を育んだ。

工夫と想像の企業の組織、ここに生産的な個性の誕生となる。しかしこの個性もいつかは死んで行く人間以上の何物でもない！(ADA, p.239ff.)

テーラー・システムへの言及は管見のおよぶ限りこの二例を読み取るこ

³⁶ テクノクラシー運動については注⑩に詳細をまとめたので参照されたい。なおテーラー・システムについては、次章で注目するシモーヌ・ヴェイユの「工場日記」において「わたしたちは、機械と同じように扱われているのよ……だれかほかの人が、わたしたちにかかわって、考えてくれるのだわ……」(これはまさに、テーラーの言葉である。しかし、深い悲しみをこめて、彼女はそういった。) (田辺保訳「工場日記」, ちくま学芸文庫, p.184, 筑摩書房, 2014年)と言及されている。

さらに訳者である田辺保による解説には「三六年にレオン・ブルムの人民戦線内閣が成立し、諸種の改革や団体協約などを実行にうつすまでは、工場環境も労働条件も最低といってよい劣悪さの中にあった。しかも、生産効率をあげるためにテーラー・システムのような科学的管理法が工場内に導入され、時間測定によって一定時間内にある分量の仕事を果たすというスピードと能率が労働者に課せられた。賃金も従って、出来高払いの能率給であった。賃金の絶対的な低さとともに、こうした合理化がどれほど労働者を屈従におとし入れ、その人間性を踏みしめるものであったかを、シモーヌ・ヴェイユもまたあらゆる場面に体験し、くりかえし具体的な例に即してその隷属の苦しさを告発している」(p.266)とある。テーラー・システムのとらえ方についても、ル・コルビュジエとヴェイユの理解はほぼ真逆に近く、留意が必要である。

ができたが、そのいずれも冷たい経済合理性による効率性にのみ注目しているのではない。『ユルバニスム』では、労働者の組織論また労働賃金の支払いの組織論に触れているのに対し、「告白」では組織と創造との夢が語られる。これら人間的なものと自然的なものとを組織化し工場、緑地、住居、公園……を統一し調和あるものとして、まさに「生きる喜びとしての都市風景」をル・コルビュジエは見出していたのである。

これらの知見をもとに、改めて『輝く都市』の扉、プラトンの『饗宴』の一節が引かれている意図に迫りたい。言わずもがな、扉に冠せられた一節にこそ、この大著全体の意図をひもとく鍵が示唆されていよう。

……創造の才に恵まれたすべての詩人、芸術家達は、智恵や、魂のもろもろの他の徳性の父ではなかったろうか。そして——とディオティメスはさらにつけ加えていった——その智恵にも多くの形があるが、最も美しい、最も高い智慧は、都市と家庭を組織する仕事にたずさわるものである。それを名付けて、人は慎重と正義という……。(MPU, p.9)

ソクラテスに「恋愛道を教えた」とされる「マンティネイアの婦人であるディオティマ」^⑦の話が引用されている。Διοτίμα をディオティメスと表記されているが、フランス語表記の Diotime の語尾「e」を戦前の習慣で「エス」とラテン語風に転写したために起こったのであろう。プラトンの原文(ステファヌス版全集の209A7-B1)から大きく補足が加えられた訳文となっているが、これはフランス語訳本に起因する。

文献学的な精査^⑧はともかく、飽くまでフランス語訳がル・コルビュジエの琴線にふれた箇所が大切である。それは「最も美しい、最も高い智慧は、都市と家庭を組織する仕事にたずさわるもの」の件にちがひなく、まさに先のデカルト的精神の合致をわれわれは見る。さらに次頁にル・コルビュジエの言葉が書き記されているが、『饗宴』からの引用と響き合う形で理解する必要がある。内容そして書籍の構成から考慮しても、これは引用された一節への解題なのである。

……これからの努力すべきことは、現在の社会を不統一から救い、それを調和へと向けることである。世界は今、調和を必要としており、調和をもたらす人々の手によって導かれてることを必要としている。(MPU, p.10)

ディオティマの「都市と家庭を組織する仕事」をル・コルビュジエは「調和をもたらす」と理解していたことを暗示している。加えてル・コルビュジエは「日

⑦ 鈴木照雄訳／プラトン『饗宴——恋について』／『プラトン全集 5 饗宴 パイドロス』, p.74 (2010), 岩波書店, 1974年

⑧ 特に重要な箇所として「都市と家庭を組織する仕事」は φρόνησις πολιτική に当たる。そのままの訳であれば「政治の実践的な知」となる。πολιτική に対応するフランス語の politique (政治) には、ギリシア語に含まれる cité (都市) と foyer (家庭) の語感が消えるため、訳語として補われたのであろう。鈴木訳本(プラトン全集)においても「国と家」(p.93)と意識されている。

なおポイエーシスについての知(フロネーシス)は、『国家』において体系的に追及されているのは周知のとおりである。ポイエーシスのうち政治術こそが最も優れた知として論じられている。「組織する」に当たる言葉は原文には該当する語が無い。飽くまでも意識であることに留意が必要である。

本の人たちにと次の言葉を贈ってくれた」(MPU, p.271)と坂倉があとがきにて紹介していることは、その証左となるであろう。

恐らく日本にいるわれわれの友人達は、調和のとれた文明(必要なのは調和である)の中に希望を持ち得る理由をこの書の中で見付けてくれるであろう。(MPU, p.271)

ル・コルビュジエのメッセージはすでに明らかであろう。「調和のとれた文明」を築くこと、このことが建築家として第二期の機械文明の時代の課題であることがこの大著の全体を通して示されているのである。

以上、ル・コルビュジエの機械概念から都市計画の思想を読み解いてきたが、二十世紀の巨匠が畢生の仕事としてきたのは「調和のとれた文明」の構築である。本論の関心に即して言い換えるならば、まさに近代における離大地性への積極的な挑戦あるいは建築術の実践であったと総括ができるであろう。こうしてル・コルビュジエは、機械文明の第二期において、建築家が人間の生活世界を再び調和へ導くべき使命を担うと考えた。

しかし、同じ機械文明のただ中で、人間の根が奪われつつあることを、まったく異なる角度から見つめた思想家がいた。シモーヌ・ヴェイユ(Simone Weil; 1909-43)である。

7. 大地へ根をもつこと

7.1 ル・コルビュジエの企て

シモーヌ・ヴェイユのカイエ(cahier; 雑記帳)に次の断章が残されている。

断章9 現代人の生は無謀さに浸蝕されている。無謀さが万象——精神および行動、公共および私的な生——を蝕んでいく。(たとえばスポーツ。選手権——陶酔または不快をもよおすほどの興奮、朦朧となるまでの疲労困憊、等々。)芸術も頹廃する。均衡など消えうせた。(ル・コルビュジエの企ても虚しい……。)カトリックの保守運動も部分的にはかかる傾向への反動である。たしかにカトリックの儀式は無疵で残っている。一方で、カトリックの儀式が人間実存とまったく関係がないのも事実である。(富原真弓訳「34章 代数学」／『重力と恩寵』岩波文庫, p.266, 岩波書店, 2017年 下線部は引用者による)

この断章について、訳者である富原はル・コルビュジエの生没年とともに建築の特徴を紹介しつつ「周囲の景観と建物とが絡みあうピロティや屋上庭園が

特徴的である。社会とのつながりを重視するが伝統からの脱却を強調するという意味で、伝統との継続性を維持するが社会との関係性は希薄なカトリック教会との対照をなす」(ibid., p.406) とこの断章の解釈を示している。

富原の解説は、ル・コルビュジエとカトリック教会の保守運動の反動とを、対称的な図式に置くことで、きわめてバランスの良い理解を提供してくれる。ル・コルビュジエにおける社会とのつながりの従事に対する伝統からの脱却という関係^⑨は、カトリック教会における伝統の継続性と社会との関係性との希薄化という関係とちょうど逆対称的でもあると言えよう。

ただし、この断章の前半には現代人の無謀さ、公共あるいは私的な生の浸蝕としてのスポーツ、あるいは芸術の頹廃という文脈が語られている。特に、「芸術も頹廃する」という文脈でル・コルビュジエが名指されている意義は、余白として残されている。ヴェイユの意図はともかく、このカイエの編集者であるギュスタヴ・ティボン(Gustave Thibon; 1903-2001)は、この断片を「代数学」の章の中におさめていることは、極めて意味深長と言えよう。

現代人の無謀さとしてヴェイユがあげたスポーツへの陶酔、興奮、疲労感といったものは1940年代だけでなくその八十年後の現在、スポーツの商業化はマスメディアによる扇動により一層強く実感するところであろう。芸術の頹廃も含めこれらはすべて、近代社会における「根こぎ(déracinement)」の状況を描写しているとも考えられる。

さらにル・コルビュジエが、「芸術」の文脈において取り上げられているならば、やはり富原が指摘するような「社会とのつながりに従事する」側面を考慮しつつ、彼の「建築作品としての芸術性」についてヴェイユが批判している、と考えるべきであろう。

ところで、ル・コルビュジエは『ユルバニスム』の「まえがき」に、次のような言葉を残してる。

家は、新しい建築の問題を課す——全く新しい実現手段の問題を課し、新しい生活様式に適した完全に新しい平面の問題を課し、新しい精神状態から生ずる美の問題を課すことによって。(U, p.10)

この家が課した諸問題は、「美、経済、完全、近代都市」において「現在の都市は、幾何学的でないために死にかけている。高層に建てること、それは不格好で無思慮な敷地——今日、あるのはこれだけだ——を規則正しい敷地にかえることだ」(U, p.164)と断言されるが、さらに「大量生産」においてもほぼ同様の主張が繰り返される(U, p.205)。この主張の直後に

規則的な設計の結果は、大量生産である。大量生産の結果は、標準

⑨ この富原の解説に近い構造を示すヴェイユの言説を以下に示す。「未来のことのみを考えようと過去に背をむけても徒労に終わる。そのような態度に可能性があるように信じるのは危険な錯覚である。」(山崎訳, 「第二部 根こぎ」/『根に持つこと』, p.82)

④ 代数学と幾何学については、後述する大嶋の解説に譲る。代数の抽象性による「具体的な成果の置き去り」が十七世紀以降の科学の発展となったことをヴェイユの解釈として紹介している。一方、ル・コルビュジエは幾何学について次のように語っている。

幾何学は、周囲を知覚し、自己を表現するためわれわれが得た方法である。幾何学は基礎である。それはまた、完全、神性を意味する象徴の物質的な支えでもある。それはわれわれに、数字の高揚した満足をもたらす。機械は幾何学から生まれる。現代はそれゆえ、きわめて幾何学的である。現代は、その夢を幾何学の喜びに向ける。現代の芸術と思想は、一世紀の分析の後に偶然的な事実の彼方を探り、そして幾何学によって、数学的秩序、ますます普遍化される態度に導かれる。(『ユルバニスム』, p.10, ただし下線部は引用者による)

ル・コルビュジエにおける幾何学は機械の起源として語られるように、機械との類比性の高さを指摘できる。ヴェイユの場合も「代数学」断章1にも記されているように、金銭、機械使用、代数学に対して「完璧なる類比」と記されているように、機械(使用)と代数学の類比性の高さが語られている。

しかし、ル・コルビュジエの幾何学についての言説は、『建築をめざして』(Vers une Architecture, 1923)においてもまた『モデュロール』(Le Modulor, 1950)においても、建築形態という具象のなかにみせるある種の神性——トラセ・レギュラトゥール(tracé régulateur)にみる幾何学的な作図体系あるいはモデュロール(le modulor)における人間の尺度をもとにした黄金比そしてフィボナッチ数列による幾何学的秩序の構築など——が随所に語られているため、ヴェイユが問題にする代数学とは根本的に異なる。

であり、完全さである(聖の創造)。

大量生産がすべてを支配する。大量生産なくして、もはや正常な値段で工業生産をすることはできない。大量生産なくして、住宅問題を解決することは不可能である。(U, p.205ff.)

一方、冒頭に引用した『重力と恩寵』の第34章「代数学」のはじめにヴェイユの次の断章が、ル・コルビュジエの主張と比較考察を可能にする視点を提供してくれる。

断章1 現代世界の頹廃の特徴のひとつは、努力と努力の成果をむすぶ関係性を具体的に思考できないことだ。これを忘れてはならない。介在物が多すぎる。他の場合とおなじく、関係性は思考ではなく事象のなかにやどる。すなわち、金銭のなかに。

金銭

マシニスム
機械使用

代数学

現代文明の三つの怪物。完璧なる類比。(p.263)

ヴェイユの「金銭」に対してル・コルビュジエの「正常な価値で工業生産をする」こと、「機械使用」に対して「大量生産」もしくは「工業生産」、「代数学」に対して「幾何学」^④というみごとな構成的な類似性を形成している。

このまま図式的な構成をもとに判断するならばヴェイユが頹廃となづけた「現代文明の三つの怪物」がル・コルビュジエの大量供給住宅の在り方にぴたりと当てはまる。それゆえに、ヴェイユが「芸術も頹廃する」のなかに「ル・コルビュジエ」の名をあげた、と形式的に判断することもできそうである。

残りの「均衡など消えうせた」の句についてはどうであろう。飽くまでも頹廃の文脈で理解する限り、「現代世界の頹廃の特徴のひとつは、努力と努力の成果をむすぶ関係性を具体的に思考できないことだ」という。ヴェイユが頹廃の中にあげている「代数学」について、大嶋仁は次のように解説する。

ギリシャ数学がある程度まで数論や解析を発達させたにしても、その基本は幾何学であった。幾何学とは図形の科学であるから、つねに目に見える現実とのつながりを持っている。そのような具象性は代数にはない。代数はもともと抽象的なものだ。

代数は抽象的であればこそ、すなわち抽象的な記号を用いればこそ、異なった数学の分野を一つに結ぶことができる。計算が簡便化されるだけでなく、あらゆる事象を一般化して表現できるのである。

だが、他方では、具体的世界が置き去りにされる。そういう代数が十七世紀ヨーロッパの科学で駆使され、それが科学のめざましい発展を可能にした。その結果、科学は人々の日常感覚、常識からかけ離れたものになったのである。（「第1章 シモーヌ・ヴェイユにおける代数と詩」／『科学と詩の架橋』, p.28ff., 石風社, 2022年）

ヴェイユの代数学への批判的な洞察で大切なのは、数学で表現される事象と具体的な世界との断絶にある。幾何学は「目で見える現実」という具体性により、数学で表現される事象との間は架橋されている。そのためこの代数学への批判的考察が、ヴェイユにとっての近代機械文明全体の「根こぎ」状態という手厳しい診断につながる。

それゆえ、頽廃の特徴とは「努力と努力の成果を結ぶ関係性」すなわち均衡が「具体的に思考できない」こと、つまり代数的な関係となること、と断片をつなぎ合わせれば理解できるようになる。したがって「芸術も頽廃する。均衡など消えうせた」の句とは、芸術そのものが代数的となること、つまり作品と現実の世界との均衡関係が見えなくなってきたことを象徴している、と条件付きながら理解できるであろう。

ここで「作品と現実の世界」というのは、「数学と現実」に対応させるための方便であるため、ヴェイユ自身の言葉にもどり確かめることにしよう。

断章4 芸術の目的。空間と時間をわれわれに感知させる。（「第33章 美」／『重力と恩寵』, p.256）

断章21 芸術に（無媒介的な）未来はない。というのも、あらゆる芸術は集団に帰属すべきなのに、もはや集団の生は存在せず、死せる集団しか存在しないからだ。（ibid., p.261）

芸術とは本来、時間と空間を感知させる媒介的な働きがある。しかし時間と空間とはデカルト的な、いわば感覚器官をとおしていかに「延長」が把握されるかという情念論的な意味では断じてない。その芸術が帰属する集団、すなわち根づかれた民族により共有される具体的な世界として、その深みは神への恩寵への媒介を直観させるものでなければならない。

「芸術も頽廃する」の句の直前は、根こぎとなった現代人の生についての警句であったことを踏まえると、頽廃しつつある芸術とは、「根こぎとなった現代人」つまり「死せる集団」に帰属している状況をヴェイユは目撃していたのではないか。それゆえ芸術が均衡を保つべき根づきの世界との「均衡」はすでに消えうせた、と断ずるのである。

第33章「美」の断章21には、芸術の再生として「深きにある民衆的源泉に端を発する演劇、さらには建築も」とあるが、件の「芸術も頽廃する」(第34章「代数学」の断章9)の芸術は、演劇や建築のみならずひろい意味での芸術を指すとも考えられる。しかしヴェイユはこの断章9においてル・コルビュジエを名指していることから、この芸術には建築が強く意図されていると考えるのが至当であろう。

以上の考察から、第34章「代数学」の断章9における「芸術も頽廃する」とは民衆的源泉との関係を失くした芸術、特に建築芸術の頽廃を論じたものだと帰結する。となるとここに奇妙な矛盾があらわれる。「ル・コルビュジエの企ても虚しい」とは、今までの議論の前提としてきた『ユルバニスム』を傍証に例示した大量生産住宅のことを揶揄しているという素朴な見通しは成り立たなくなる。

そもそも、ル・コルビュジエの企てが何を示唆しているのでしょうか。ヴェイユが目にした体験からの言葉と考えれば、その企てに対する方向性はつかめるかもしれない。例えばアトリエ・オザンファン(Maison-Atelier Ozenfant; 1922-23)は「源初的感覚」を表明する幾何学的な秩序の探求の軌跡」を示す作品として、またレスプリ・ヌーヴォ館(Pavillon de l'Esprit Nouveau; 1925)であれば「近代建築の五原則」として鮮やかに定式化された建築理論の一徴表」を示す作品として、いずれも機械文明を予言した作品^④であり、そこから「ル・コルビュジエの企て」を汲んでいたと考えるのが妥当ではないであろうか。

これら二十年代を中心とした作品群——考えにくい『輝く都市』などの都市計画プロジェクトも含めて——に対してヴェイユが「根こぎ」の表徴と見ていたならば、「虚しい」というよりは、むしろ根こぎにされたフランスにおける「力」^⑤の象徴として語られるであろう。ファシズムやマルキシズムあるいは大企業の工場を徹底的にその攻撃の対象としたように、自己を高めるもの、労働者を抑圧するもの、果ては過剰さや「無謀さ」として語られていたのではないだろうか。

ヴェイユ自身も、戦後の復興期に建設される住宅や建物が「おそらくいくたの世代にわたって社会生活全体を決定することになる」ことを自覚しており、したがって「あらかじめ、近い将来における産業企業体の組織化にかんする明確な考え方を確立しておかねばならない」(山崎庸一郎訳「第二部 根こぎ」／『根をもつこと』春秋社, p.108, 1967年)と提言している。ル・コルビュジエとは違う立場から、彼女も労働組合論を基に仔細にわたる分散型の工業小都市論と言うべき都市計画の骨子を展開している(ibid., pp.108-113)ことは忘れてはならない。

それゆえ「虚しさ」とは、ル・コルビュジエの企てそのものが、この四〇年初頭であっても、それを実現するに適切な状況が熟していないことに対するヴェイユの感慨であったと受け取る余地も残されていよう。

芸術の再生の可能性について、ギリシア芸術から十九世紀芸術までの歴史を

④ アトリエ・オザンファン、およびエスプリ・ヌーヴォ館に対する評価については中村貴志「ル・コルビュジエの言葉による生涯と作品」(『ユリイカ総特集 ル・コルビュジエ』vol. 20-15, p.110, 青土社, 1988年)によった。

⑤ 「力」についての概念は『重力と恩寵』の富原の「訳者あとがき」の解説が参考になる(p.434ff.)。またヴェイユは「根をもつこと」の後半においてこの「力」と摂理、必然のメカニズムについて集中的な論考を残している(pp. 372-383)。

概観したうえで、「《^{ユニオニスム}一体主義》そのものも戦前でなければ成立しえなかった」(「第33章 美」／『重力と恩寵』, p.261)とヴェイユは語る。さらに「一九一四年以降、まったき断絶が生じる……大いなる無秩序の渦中からでなければ、芸術の再生はあるまい。……深きにある民衆の源泉に端を発する演劇、さらに建築も」(ヴェイユ loc. cit.)と断じている。「大いなる無秩序の渦中」という重力を担うことを通して、つまり徹底した根こぎの経験を通してでなければ、建築の再生もない、ということであろう。

ヴェイユとル・コルビュジエは、機械文明が人間の根を奪うという同じ問題を見ていた。しかし、その応答の方向はまったく異なる。ル・コルビュジエは外的世界の再構築へ、ヴェイユは内的世界の再構築へ向かったのであった。この分岐こそが、離大地性の「離」の二つの実践形態を示していると言えよう。

7.2 離大地への応答

ヴェイユの断章にあらわれたル・コルビュジエの企てへの注目は、近代建築への否定を動機としたものではない。むしろ機械時代をともに生きた哲学者と建築家との立場のちがいが、離大地性を描きだすための補助線として見るべきであろう。

ヴェイユは高等中学リセの哲学教授でありながら、女工として工場体験へと飛び込んでいくなどアカデミーにおける哲学研究を拒否し続けたことでも有名である。一方、ル・コルビュジエもフランス建築界のアカデミーと真っ向から対立していたことは前章でも論じてきた通りである。

また政治思想も双方、サンディカリズム(労働組合主義)の思想をもちながら、ヴェイユは最晩年には自由フランス側に、ル・コルビュジエはヴィシー政府側に与していた。ヴェイユは実際には叶わなかったが、前線での戦闘員に志願する一方、ル・コルビュジエは急進的な計画主義・国家社会主義思想家の一面をもっていた。

この二人はあらゆる点で真逆に近い立場でありながら、不思議と極めて近い歴史的俯瞰的な視点あるいは課題意識をもっていた。二十世紀にあらわれた機械文明における離大地傾向という文明史的テクニクス⁴⁹に対して、それぞれの向き合い方を観測することは、その全体像をつかむことに寄与するであろう。

前章においても触れたが、ヴェイユも戦後の再建事業として、工業を人間生活に根づかせる施策を提案している。彼女自身1934年から8か月間の未熟工として労働を行い、日々の単純労働の中で思考を奪われていく体験を通して労働者の自尊心がいかに壊れていくかを『工場日記』のなかで詳細にわたり書き記している。それゆえヴェイユは「労働者の根こぎ」の章末に「戦後の再建事業は、ただちに工業労働の分散を鉄則としなければならない」と説く(「労働者の根こぎ」／『根をもつこと』, p.113)。

④ 多木浩二はル・コルビュジエの政治的関与について、「我々はある種の、しかも大きな政治、リオタールの考えるところとは違って大きな物語としての政治との関連の中にあることは自覚しないわけにはいかない。コルビュジエはこのことを、自分が人類史のある時点にコミットするように体现していたように見えます」と語り「コルビュジエの政治学というものに二、三〇年代の巨大な歴史——あえていいますと「帝国主義(と呼ばれる資本主義の段階)の歴史学——というものを読んでいこう、と思っています」とある(多木浩二、八束はじめ「ル・コルビュジエ」とは何か?——現時点のとらえ方の枠組みをめぐる」／『ユリイカ 総特集 ル・コルビュジエ』, p.46ff.)

大工場は解体されなければならない。大企業は、多数の小工場に直結した一つの組立工場となる。これら小工場は田園に分散し、その各々は一名ないし数名の労働者よりなる」。(『労働者の根こぎ』／『根をもつこと』, p.108.)

④ この実感については、「アルベルチヌ・テヴノン夫人にあてた手紙三通」(『工場日記』, p.255)を要約した。

⑤ イヤサント・デュブレユ (Hyacinthe Dubreuil; 1883 - 1971) か? 「道徳的条件」に次の原注がある「本章は、自動車産業における元労働者、職工長であり、経済学者、社会学者でもあるH. デュブレユによって作成された。」とある(p.52)。Wikipediaによると「改革派のデュブレユの野望は、企業内の集団間の取引システムに基づき、収益の公平な分配にバランスを取る「理想的な工業都市」を建設することでした。」とある(https://fr.wikipedia.org/wiki/Hyacinthe_Dubreuil, 2026年7月15日参照)。

大工場のプレス工程での労働を通じて、官僚的かつ非人間的に企業組織が細分化されていた実感^④から大工場、大企業の解体を最優先に説く。この点はル・コルビュジエの工業論と真っ向から対立している。アスコラル(ASCORAL)の第八研究部会〈企業〉において「なによりもまず、建造を合理化し、建物を工業化し、建物を機械の支配力の下にゆだねなければならない。それこそ、実際にこの衝に当たる者の仕事であり、将来の実業家、企業家に期待するところなのである」(『11の部会の研究による理論確立』／MPU, p.265)と記しており、加えて『レスプリ・ヌーヴォ』誌を出版した1920年代にル・コルビュジエは「企業の倫理は変革された。大企業は今日、健全な倫理的な機関である」(吉阪隆正訳「革命か変革か」／『建築をめざして』SD選書21, p.205, 鹿島研究所出版会, 1967年(以下VUA))との見解を披露している。ところでル・コルビュジエの工場組織論については、アスコラルの一員であるH. デュブレユ^⑤による次の言葉に集約されている。

建築は、有用であると同時に調和のとれた一つの全体を創出せんがために、素材を選択、配置しようとする。それと同時に、組織化も、人々の間に調和のある平衡状態が確立されるように、彼等を選択し、地位に就かせようとする。このように、組織化も一種の観念的建築であり、その組織全体は感銘的でさえあるので、最も非抽象的な人々でも頻繁に「社会機構」なる表現を用いるほどである。(『道徳的条件』／TEH, p.53)

一方、ヴェイユの『工場日記』の序文に寄稿したアルベルチヌ・テヴノンによると彼女は、社会主義とは「労働者の経済的支配であって、国家の官僚的・軍事的な機構による支配ではない」のであり、労働組織の中に「機能という名による抑圧」という新しい抑圧の形式が生まれることを見ているという。続けてヴェイユは「実際に働く人たちが、秩序だて統合する人たちに従属することによって成り立っている生産の様式においては、おのずから、官僚階級の独裁という特徴をもつ社会構造を生み出すかもしれないということが、知られていないのだ」(田辺保訳「序」／『工場日記』ちくま学術文庫, p.10f., 筑摩書房, 2014年)と指摘しているようである。このことは先の分散型の工業小都市像を示した後にも断固として論断されている。

とにかく、以上のような社会生活形態は、資本主義的でも社会主義的でもない。

それはプロレタリアートの境遇を解体させる。しかるに、社会主義と名づけられているものは、実際において、あらゆる人間をその境遇に追い落とす傾向があるのだ。(『労働者の根こぎ』／『根をもつこと』, p.113)

ヴェイユは「機能」あるいは「組織」という概念のなかに、労働者を抑圧する新たな形式、つまり構造を、その鋭い知性において見抜いていた。そのため生産手段である「機械は企業の所有とはならない。各地に分散した小工場がこれを所有し、かつそれらの小工場もまた、個人的ないしは集団的に、労働者たちの所有物となる。各労働者はさらに、住宅と若干の土地を所有する」(ibid., p.109)との理想的な労働組合論を謳う。

一方、アスコラルあるいはル・コルビュジエら急進的な社会改革派は、機械文明の第一期において「即席で間に合わせるのに急いだため、工業は勝手に集中し、今まであった都会を法外に大きなものとし、そしてこの間、一方では一まさにそのために—工業が労働力をどんどんあつめて絶えず増大していくので、国土は次第に見捨てられてしまった」(MPU, p.40)との状況に対して、「現代社会にその新しい生存理由を示し、来るべき最初の時期——機械主義文明の調和期——のために、行動の目的を教える」(MPU, p.212)ことを目指していたことから、やはり国家権力など力による国土の組織化を指導しているという自負の念が透かし見えてくる。

この二人の相違は、本質的に労働者にとっての「技術労働の意味」のちがいとしてさらに闡明にあらわれる。ヴェイユの描いた工場においては、次のような労働教養ともいうべき教育が課せられるという。

労働者のひとりひとりに、自分が生産する部品の有する正確な機能と、他人の努力をまっしてはじめて克服される困難とをはっきりと認識させるための技術的講演、彼らが製造に協力した製品がどこに行くか、どのような人たちがそれを利用するか、いかなる種類の社会、日常生活、人間環境においてそれらの製品が場所を占めているか、および、それがどんな場所であるかを教えるための地理的講演に、残りの時間は捧げられなければならない。(『労働者の根こぎ』／『根をもつこと』, p.109)

このような労働教養が課される意図は、労働と生産されたものの乖離により労働の根こぎを防ぐためであろう。ジョン・ラスキンが『建築の七灯』にお

④ 高橋泰川訳／ジョン・ラスキン「訳者序」／『建築の七灯』（岩波文庫，p.3，岩波書店，1930年）、岡田隆彦編『アールヌーボーの源流 ウィリアム・モリスとその仲間たち』（双書美術の泉34，p.7，岩崎美術社，1978年）を参照した。なおこの労働教養の必要性について、ヴェイユの次の説明が参考になるであろう。「自分がしている仕事、いったい何に使われるものかをまったく知らないでいることは、非常に意気をくじけさせるものである。自分がいろいろと力をつくしているところから、一つの生産物が生れ出てくるのだという感じをいただくことができないからである。自分もまた、生産者の列に加わっているのだという自覚を持つことができない。それにまた、労働と報酬との間の関係についてもわからない。ただ、やみくもに仕事で課せられ、でたらめに報酬が払われるように思っている」（『断片』／『工場日記』，p.198f.）。

いて意匠家が制作の実地に通曉すべきことを説いた精神、あるいはウィリアム・モリスが示した工房精神（クラフトマンシップ）^④に通じるであろう。その一方、ル・コルビュジエが描く工場生産には既に、工房精神は存在しないが、しかし集団的な精神はあるという。

工業は部品の量産に入った。機械が人間と密接に仕事をしている。知恵の淘汰は乱れることなき確実さで行われ、手下、職工、係長、技師、部長、所長おのおのその場がある。所長の素質のある者は長く手下に止まってはいない。すべての地位は開かれている。専門化が人を機械に結びつける。……父はもはや子にその小さな職の多くの秘密を教えることはない。他人の係長が厳格に仕事を監督し、限られた密度高い仕事をするだけだ。……工房の精神はもう存在しないが、もっと集団的な精神は確かにある。もし職工が賢いならば、彼の労働の宿命を理解し、それ相当の自負を持つようになるだろう。オート誌が、某社が時速二六〇キロを出したと書くとき、職工たちは集まって、「われわれのつくった車がやったのだ」というだろう。これは倫理的に判断されるべきことだ。（『建築か革命か』／VUA，p.198ff.）

ヴェイユの場合、冒頭にも記したが、長期間にわたる単純労働と監督者の絶え間ない叱責、過労による身体の疲弊により労働者の自尊心が破壊されていく現場を、そしてフランスきっての自動車会社ルノーの組み立てラインでの流れ作業において、誤差や遅れがすぐに可視化され、隣人との連帯もまた競争となる相互不信が生々しく現れる現場を体験してきたという（『ボリス・スヴァリヌへの手紙』／『工場日記』，p.250f.）。しかしル・コルビュジエの話では、ヴェイユと同じく自動車組み立て現場を想定しているにもかかわらず、違和感をおぼえるほど牧歌的と言わざるを得ない。確かに、ル・コルビュジエは、ヴェイユのような過酷な工場労働、労働組合運動を通して労働者に寄り添ったという記録は皆無である。

ところでル・コルビュジエも工場における労働の過酷さについて——その実感はないであろうが——その状況については十分に把握していたようである。

機械文明の最初の百年の苦悩のなかで、労働は、ところによっては、つぎの例証に窺われるように、良心と風土をそれが伴うあらゆるものと同時に漆黒にした——労働—懲罰、労働—代償、労働—非人間的。結果から原因に遡って、アスコラルは逆に建築と都市計画の範疇で、人間の行為、行動のなかの秩序の思考、創造的躍動をまさに労働——毎日の、そして生涯にわたる恒久的行為——という名に移

前章で参照した箇所とも重複するが、ル・コルビュジエは労働の非人間的な過酷さそのものに対して介入するのではない。「建築と都市計画の範疇」において、むしろヴェイユ的に言うならば人間の尊厳の回復を「事物的手段」により実践したと言えよう。つまり、あの異様な明るさで描かれた労働における「集団の精神」とは、事物的な解決手段が十全に講じられた「後」の世界像とすれば筋がとおる。それゆえに未だ到来せぬ、機械文明の第二期の労働倫理の確信が謳われていたと理解すべきであろう。

ヴェイユの分散型の工業小都市像を生みださせた原体験は、すでに何度も言及してきたように過酷な労働体験からであったが、ル・コルビュジエの場合はどうであろうか。その負の経験は「蝸牛の殻」として象徴的に語られている。

現在の工業の物凄い活躍、これについては当然大いに関心があるのだが、刻々にわれわれの目前に、直接あるいは新聞雑誌を通じて目を見張るような新しい物ごとを見、なぜかと心配したり、喜んだり、不安がったりする。これら現代生活の物品は最後には現代的な心の在り方をつくり出す。そこで古くて腐った、いわば蝸牛の殻、われわれの巢に目をやり、それが毎日の接触で窒息させられ、腐敗し、無用で効果の上がらぬものであることを驚きをもって見直すのだ。一方至る所に何かを生産する機械が見られ、しかも立派に、純粹につくり出している。われわれの住む機械は、結核菌だらけの古くさいかくれ場所だ。日々の活動、工場で、事務所で、銀行で、健全な有用な生産的なそれと、家庭のどれもこれもおくれた生活との間に橋をかけていない。どこでも家庭は殺され、時代錯誤なものの奴隷に結びつけて心を墮落させている。〔「建築か革命か」／VUA, p.200f. 下線部は引用者による〕

人間を囲繞する物品つまり事物的環境全体が「心の在り方」をつくるというこの観点は、ル・コルビュジエの建築そして都市計画へのパトスを理解するうえで、この上なく重要な鍵語となろう。住居が結核菌におかされ、家庭は殺され、人心の墮落を建築家として、あまた目にしてきたのであろう。旧世代の人間の巢——住居ですらない——である蝸牛の殻が腐敗しているという深い自覚が、住居の刷新にはじまる都市計画として、人間が住まうすべての環境の革新にとどまらず「建築全体への革命」へと突き動かしてきたのである。

ヴェイユは機械労働において「人間の尊厳」が喪失していく現場を、ル・コルビュジエは人の住まいである住居の腐敗により「人間の尊厳」が喪失してい

く現場をともに同世代人として体験したのであろう。それと同時に文明史的な視点に立って、機械文明の時代の到来において、ヴェイユはヨーロッパ社会全体が根こぎの状態に陥っていると診断し、その死の間際まで「根をもつこと」の可能性を「恩寵」がみせる神的なメカニズムとして追求した。没後膨大なカイエは発見され『重力と恩寵』としてまとめられ、その福音は世にとどけられた。一方、ル・コルビュジエは、セーブルのアトリエでのアスコラルの研究活動、CIAM 国際会議を経て、これら長年にわたる研究成果がアテネ憲章として結実し、この壮大な都市理論をもとに建築世界全体の刷新を企てていく。

実存的なアプローチから根こぎという文明史的な病を超えていくヴェイユ、そして事物的環境へのアプローチから機械文明第一期の克服を企てたル・コルビュジエ。それぞれのアプローチはまったくこととなるが「人間の尊厳」において、ともに世界史的な離大地の趨勢に対する、大地への回帰というテクトニクスを準備したのである。

7.3 大地への帰還

近代生活あるいは直接には近代建築のなかに現れてきた自然や土地からの乖離について鈴木大拙の言葉をなぞりながら「離大地傾向」と大拙が名づけた文明史的な出来事の根本原因の追究、そしてその傾向のただなかにおいてル・コルビュジエ、シモーヌ・ヴェイユがこの機械文明の第一期の克服にどのように挑戦してきたかを観測してきた。離大地傾向という力学の兆候として、「確実性」という真理の判定基準の変更が、*cogito* を基盤とする十七世紀の偉大なる理性の時代つまり近代の成立を準備するのを見てきた。しかしその最終形態において絶え間ない *cogito* の表象化の波は *cogito* そのもののをも呑み込み、それ自身をも表象化する「力」として現代に姿を現してきていることを確認した。

この文明史的な運動の最終段階において人間は「労働者」として、その生きる世界は「技術世界」として実現していることを実感する。しかし、この動きは人間の欲望や傲慢さなどの個人道徳の問題に還元されるものではない。これは、大拙も指摘するように「近代生活は一種宿命的なもの」(大拙, *op. cit.*, p.124)であり、近代という時代固有のテクトニクスつまり「離大地」の具体的な現れなのだから。

さて、考察を終えるにあたり、大拙からはじまりル・コルビュジエ、ヴェイユへとつらなる近代の離大地傾向に対するそれぞれの応答——偶然にも1942年を観測の定点とした応答とはなったが——について振りかえることにしよう。

大拙は、近代建築そして大きくは近代生活の全体のなかに、概念的で抽象的、ことごとく論理で塗り固められた世界、人間が生きている具体性から乖離した生活について宗教者の立場から批判した。大地とはこの具体性の全体のことであり、人間がそこから生まれてそこへと還る場所、久遠の時をそこから汲み

とることができる足下の現実のことであった。そのため大拙は、「大地がすなわちわれらのからだそのもの」(ibid., p.121)とも言う。二十世紀半ばまでの後期現象学運動においても、大地あるいは身体を軸とした具体的な生活世界への回帰への呼びかけであったことが想起されても良いであろう。

大拙は、離大地傾向のうちで失われた人間性の回復のための唯一の方法は「自己反省にほかならぬ」(ibid., p.124)という。しかも「一方では近代の文化生活に対して鋭き批判を加えると同時に、他の一方では自己の内生活に向って深刻なる反省を続けること」(大拙 loc. cit.)と主張している。この真意を明かす資料はもとより無いが、自己の外と内それぞれに鋭く深い反省とは「近代生活により構築された世界」はもとより、自己の内面においても「近代生活によりすっかり人間性としてのその尊厳を喪失した自己の内面」への両面の反省を示しているのであろう。つまりこのような両面の反省が同時に起き得るとしたら、すでにそれは「まことの自己」からの省み、すなわち真のわれわれである「大地」からの省みでなければならない。大拙が「照顧脚下」と禅寺の玄関^④口に書いてある」(大拙 loc. cit.)に触れた意図は、自己の本源(久遠の時である大地)から宿命としての近代生活へ出ること、つまり己の任としてこの近代人の宿命である機械文明を担いきることを意味していると考えられよう。

大拙は「大体のところは、人間性の回復とその向上」であり「実際この解決がつかない限りは、種々な思想や施設も何にもならぬ」(大拙 loc. cit.)と言う。実際、ヴェイユは工場労働を通して人間の尊厳が単純機械労働により壊れていく様子を徹底的に自己内省することにより、「注意」への感覚を研ぎ澄ました。彼女の徹底した注意により、西洋文明そのものがすでに「根こぎ」の状態にあることが自覚された。彼女にとっての「根づかせること」とは「肉体労働は社会生活の霊的中心でなければならない」(『根をもつこと』, p.391)と結ばれている。つまり肉体労働という霊的行為を通して、自己を虚しくし、世界を恩寵として受け取る現代人の世界の向き合い方なのである。

一方、ル・コルビュジエは、「建築的関心の中心に人間を再び据える」(CA, p.144)こと、すなわち〈住むための機械；une machine à habiter〉を都市計画の全体の中核とするドクトリンである「アテネ憲章」を世界に向けて創案し、精神と自然の調和をめざし、建築の世界全体の刷新を企てた。

この二人は大拙の言葉を借りるならば、一方では「近代の文化生活に対して鋭き批判」を加えたル・コルビュジエ、他の一方では「自己の内生活に向かって深刻なる反省」を続けたヴェイユ、という近代的な自己をめぐる内外からの鋭くまた深い徹底した反省の二つのあり方であった。この三者の根づきは、それぞれが異なる立場、取り組みによる「離大地」という「近代のテクニクス」への応答であったことを示しているのである。

④ 玄関はもともと「玄妙に入る関門」の禅語から由来し、その原典は「老子河上公章句／上」の成象「谷神不死，是謂玄牝。玄牝之門，是謂天地根。」(『維基文庫』の「老子河上公章句／上」による。[https://zh.wikisource.org/wiki/老子河上公章句／上](https://zh.wikisource.org/wiki/老子河上公章句/上)，2026年7月15日参照)である。

断章34 みずからの根を絶たねばならない。樹木を切り倒し、それで十字架を作り、日々、この十字架を担わねばならない。

社会的にも植物としても自身の根を断つこと。

あらゆる地上の祖国 (patrie) から自身を追放すること。

かかる仕打ちを外部から他者に加えるのは、脱－創造の代替 (ersatz) であり非實在 (irréel) を生みだす。

だが自身の根を断つときは、より多くの實在 (réel) を求めているのだ。自我 (moi) であってはならない。だが、集団的自我である〈われわれ (nous)〉はさらによくない。

都市 (cité) はわが家にいる感覚を与える。

流謫の地にあっても、わが家にいる感覚をもつこと。

都市は根こぎへといたる代替である。

不幸にも、根づきを変容させる手掛かりも得られぬままに根を失ってしまうなら、いかなる希望が残されているというのか。

断章35 場所のないところに根をもつこと。

(ヴェイユ「第9章 脱－創造」／『重力と恩寵』, p.76 f.)